〈論文〉

第二次大戦期中立国スペイン・ポルトガルでの日本の情報活動と外交・軍事への影響

宮杉浩泰

はじめに

近年、情報活動やインテリジェンスについて関心が集まってきている。現在の国際政治・安全保障の分野だけでなく、歴史的分野でも注目が集まっている。インテリジェンスの歴史的分野の研究では第二次世界大戦は中心的テーマの一つであり続けている。そこで、本稿では第二次大戦期の中立国での日本の情報活動を検討の対象とする。周知の通り、中立国は大戦中、連合国側と枢軸側が入り乱れた情報戦が展開されており、その中で日本がどのような活動を行なったかを考察するのは意味があると考えるからである。太平洋戦争開戦に伴い、当然のことながら米英の日本の在外公館、武官室等の拠点は閉鎖され、日本の主要な交戦相手国である米英に関する情報は、同盟国であるドイツやイタリア、そして中立諸国から入手する必要が生じ、中立国の重要性は飛躍的に増大した。

主要な中立国には外務省が公使館を置き（トルコのみ大使館）、陸軍と海軍が武官室を置き、三者各々が情報活動を

行っていた。本国への報告も三者別々に行っていた。したがって、本国へ送る通信に用いられる暗号も三者とも異なるものであった。三者の協力関係は、駐在地や各々の公使や武官の人間関係や個性にも影響されまちまちであった。細部は後述するが、外務省が使っていたエージェントについて参謀本部が現地の陸軍武官に照会した例もあれば、外務省の在外公館が現地の陸海軍武官に秘匿した情報が、東京の中央で陸軍、海軍、外務省で共有され、情報の信憑性が疑われた事例もあった。

当時の主な中立国は、スイス、スウェーデン、スペイン、ポルトガル、アイルランド、バチカン、トルコ、アルゼンチンなどであった。無論、第二次大戦中の日本の中立国での情報活動については一定の研究の蓄積がある。[1] 本稿では、中立国全てを対象とするのは困難なので、イベリア半島のスペインとポルトガルの二国に絞りつつ、適宜バチカンについても言及する。対象とする時期は日米開戦以降である。そして、情報活動それ自体だけでなく、情報活動が対外政策や軍事に与えたインパクトに重点を置く。なお、引用史料中の旧字体は新字体に直し、強調点、改行の／、補足の〔　〕は、特に断りのない限り引用者が付したものである。また、外務省外交史料館は外史、防衛省防衛研究所戦史研究センターは防研と略した。

一、「一覧表」にみるイベリア半島での情報収集

一九四四年一一月下旬、大本営陸軍部では「在外武官（大公使）電情報網一覧表」（以下、「一覧表」と略す）という文書を作成した。これは、ドイツ、スウェーデン、ポルトガル、スペイン、スイス、トルコ、ハンガリー、中国で、軍や外務省が収集した情報をまとめたものである。[2] この表の中で、ポルトガル、スペインを抜き出したものが左記の

表である。

【資料1】「在外武官（大公使）電情報網一覧表」のスペイン・ポルトガルの箇所

在外武官（大公使）電情報網一覧表　昭一九、一一、二七　大本営陸軍部

国別	情報名	発信者	出所	種類	備考
			中略		
葡	M	陸武	従来在西武官ノ指導下ニ「ジブラルタル」情報ニ任シアリシ諜者「マルコ」ニシテ左ノ如キ情報網ヲ有ス	主トシテ英米	確度丙、航空情報ニ関シテハ確度稍大
〃	M（タンジエル）	〃	「タンジエル」ニ於ケル北阿諜者報及海空路ノ監視報		
〃	M（ジブラルタル）	〃	「ジブラルタル」諜者報及同地ノ英空軍将校トノ接触ニヨリ得		
〃	M（カサブランカ）	〃	葡国航空会社乗務員ノ手ヲ経ル在「カサブランカ」諜者報		
〃	M（リスボン）	〃	在「リスボン」pan-American 及 british overseas 両航空会社		
〃	P	〃	英国船員「パルフェ」（上海生レ特務機関ニ勤務セシコトアリ）		情報少シ
〃	タマシ	〃	諜者「タマシ」		情報少シ
〃	N	〃	在葡「ムッソリーニ」政権代表元伊陸軍武官「テラーニ」少将	各種	
〃	S	〃	在倫敦洪牙利諜者報	各種	
西	フ	陸武	従来在葡武官ノ使用シアリシ洪国人諜者「フイリツプ」其ノ報告中ニハ資料ヲ敵側文書ニ取リテ之ニ対スル観察ヲ述ベタルモノアリ	英米	確度乙程度ナルモ英米情報トシテ価値大ナリ
〃	タンジエル	〃	諜者報（「タンジエル」機関当時ノモノヲ復活）	英米（地中海）	
〃	ジブラルタル	〃	諜者報（新設）	英米（艦船航空）	
〃	北阿	〃	諜者報（新設）	英米（地中海）	

〃	サン（参）	〃	西国参謀本部情報	主トシテ英米	参考程度
〃	ケイ（警）	〃	西国秘密警察情報		
〃	東（E）	海武	「アルカサール・ベラスコ」（「スニエール」ノ乾分ニシテ駐英西大使館新聞班長）ヲ長トスル特務機関		
〃	北	〃	西国外務省電信課員		
〃	A	〃	在「ジブラルタル」諜者（元新聞記者タル西国人）	艦船（地中海）	海軍知識不十分
後略					

「一覧表」を概観してスペイン・ポルトガルでの情報活動でます気づくのは、両者とも、タンジール（タンジエル）、ジブラルタル、カサブランカといった地名が複数回登場することである。ジブラルタルは英国領で要塞化されており、地中海での英軍の戦略的拠点であった。ジブラルタルを押さえることにより、英国はジブラルタル海峡を統制下に置いた。ジブラルタル海峡は欧州大陸とアフリカ大陸を分ける地中海と大西洋を結ぶ極めて重要な戦略的位置を占めていた。ジブラルタル自体は英国領で、日本人は接近できないので、エージェントを通じて情報を入手しなければならなかった。カサブランカも大西洋に面し、連合国の北アフリカ作戦時の上陸地点になったことが示しているように軍事上も重要な地位にあった。そして、ジブラルタル海峡に面した港湾都市で当時スペインが占領していたのがタンジールである。

情報活動におけるタンジールの重要性は、須磨弥吉郎スペイン公使の言葉を借りれば、「タンジエルはジブラルタルと指呼の間にあり、軍港に出入する艦船が手にとるように望まれる。だから自然、ここに各方面からの諜報の網が張られることは必然である」[3]。また、須磨自身も一九四二年八月下旬からタンジールからカサブランカまでのモロッコ方

面への視察旅行に出掛け、その時の様子を「ジブラルターに出入する大小艦船の行動は手にとるやうに覗かれる仕組が、海岸の民家のそこ此所に出来てるといふことであつた。われくしも戦艦を筆頭に多くの艦船が堂々と出港して行くのを目撃した」、「タンヂェルでは、枢軸、連合の双方が鎬を削り合つて情報を漁り合つてるのをわがまのあたりに見せられた」と回顧している。[4]

タンジールの重要性については、当然、軍も認識しており、スペイン駐在陸軍武官・桜井敬三は、[5] 一九四二年三月中旬、タンジールに総領事館を設置するように提案し、その理由を「英米ハ固ヨリ独伊共ニ総領事館ヲ置キ之ニ公使級ノ腕利キヲ配置シ其ノ下ニ陸海軍武官ヲ置キアリ従ツテ武官ノミヲ常駐セバ併セテ外交代表機関トシテノ活動ヲ要スルコトトナリ本念ノ軍事諜報勤務ニ専念シ得ザルノ不利ヲ生ズ」と指摘している。[6] 結局、タンジールでの正式な領事館設置はスペインの反対で実現しなかったが、この桜井の提案がなされた時点で陸軍は既に長谷部清をタンジールに常駐させ情報活動にあたらせ、一九四四年五月まで長谷部はタンジールに駐在した。[7] 長谷部がタンジールから送った情報は、具体的には「30／11タンジール武官報　○伊国作戦ニ参加ノ英艦隊主力／B〔戦艦〕×4　A〔空母〕×3　其他ハジブラルター通過、英本国へ」[8]、「タンジール武官、一二、二五報告、地中海に於ける英国艦隊、戦艦五、巡洋艦一五、駆五五、潜五〇、イタリヤ海軍より鹵獲せるもの、戦五、巡六、駆三〇、潜二五」[9] といった（以上の引用史料二つはいずれも一九四三年）、地中海での連合国の艦船の動静である。ジブラルタル海峡を経て地中海からインド洋を通過し、対日戦に使用される可能性がある艦船を把握することは重要なことであった。[10]

須磨は戦後連合国側の尋問に対し、タンジール来訪の際にイタリアの外交官から、艦船動向を把握する目的は、連合国は自らの艦艇の動きを暗号で絶えず報告しているので、それらの暗号を解読するための手掛りとしている、と告げられたと答えている。[11] 艦艇の動きを把握し、艦種や隻数が判明すれば、それらの情報を暗号解読の突破口として利

用することは十分考えられることである。ただ、ドイツ、イタリアはともかく、日本は地中海での艦隊、輸送船団の情報を暗号解読のために援用する余力はなかったと思われる。

桜井敬三は戦後連合国側の尋問に対し、リスボン駐在の陸軍武官との連絡は円滑で、互いの活動について承知しており、リスボンの武官が得た情報をよく見たし、その逆もまた同様であり、ジブラルタルを通過する艦船などに関して有益な点検の機会になったと述べている。(12) つまり、スペインとポルトガルの武官は互いの情報を相互に交換し、情報の確度を判定していたことになる。無論、スペインからの情報とポルトガルからの情報の比較は参謀本部でも行っていたであろうし、そのような作業の結果や参謀本部で持っている他の情報を加味し、「一覧表」にあるように、ポルトガル武官のMという情報の確度は丙、スペイン武官のフという情報の確度は乙と判定していたと思われる。また、ポルトガルとスペインの陸軍武官間では単なる情報交換だけでなく、エージェントの乗り入れがあり、「一覧表」の出所の欄にもある通り、ポルトガルのM情報は従来、スペイン武官がジブラルタル情報のために使用していたマルコであり、スペインのフ情報は従来、ポルトガル武官が使用していたハンガリー人フイリップであった。

二、東情報への軍部への反応

第二次大戦中の中立国での日本の情報活動で最も有名なのが、須磨弥吉郎公使がスペイン人のエージェントであるアンヘル・アルカサール・デ・ベラスコ（Ángel Alcázar de Velasco）を使い米英に諜報員を潜入させたことであろう。ベラスコからの情報は、東情報とも言われた。「一覧表」では、海軍武官の箇所にベラスコの名前が登場するがこれは何らかの間違いと思われる。先行研究も多く、ベラスコと日本の関係は不透明な部分も依然あるとはいえ、相当

程度明らかにされてきた。[13] 事実関係を簡単に要約すると、中立国とはいえ枢軸寄りだったスペインの外務大臣でフランコ（Francisco Franco）の義弟であるセラーノ・スニエール（Ramón Serrano Suñer）の協力を得て、米国に複数のエージェントを送り込み、その諜報網のトップがベラスコであり、東情報を出し、高度に政治的な情報から各軍港での輸送船団の動き、個々の兵器の情報などを日本に伝えた。ここからは、東情報と日本の関係を示す新たな史料を提示し、軍部と東情報の関係を考察する。

その史料は、一九四二年七月三〇日にスペイン駐在の陸軍武官である桜井敬三が、参謀次長宛てに送った電文四七四号を米国が解読したものである。[14] 管見の限り、この桜井の四七四号電に触れた研究はないと思われる。冒頭で桜井は、「照会された貴電六七三号と須磨公使電について（Reference your wire 673 and Minister Suma's wire）」と告げ、参謀本部からの六七三号電による問い合わせと須磨からの電報に対して自らの見解を披瀝する形をとっている。六七三号電は米国も傍受しておらず、日本側にも現存していない。続けて桜井は、「この情報の責任を担っている男はスペイン人で、この種の工作に非常に熟練している。しかし、彼は軍人ではないし、したがって、彼の報告の信頼性を保証することはできない（The man responsible for this intelligence is a Spaniard and very skilled in this sort of work. However he is not a military man and consequently we can't guarantee the reliability of his reports）」と述べている。

桜井が触れている情報工作に熟練している男とは誰であろうか。桜井電は、冒頭でも述べられているように須磨電に対する返答にもなっているが、須磨は七月二二日の第七八一号電のなかで、即ち桜井電の約一週間前に東情報についてスペイン国内での伝達経路やドイツとの関係、情報の主目標などを外務本省に報告している。[15] その中で、東情報の責任者であるベラスコの経歴、人柄、スニエル外相との関係にも言及し、「機関長「アルカツサー、ベラスコ」ハ前述ノ如ク独逸特務機関ト約二ヶ年間連絡アリ西班牙内乱時代ヨリ「スニエル」ト特殊関係成立シ当時ノ殊勲ニ依リ

「ファランヘ」党内訌ニ連座シ死刑ヲ宣セラレタルモ「ス」ニ救ハレ無罪トナリ諜報機関設立ヲ兼ネ在英大使館付新聞班長ニ転出帰朝後ハ「ス」ノ陰ノ人トシテ活躍ヲ続ケ居レリ性格ハ侠客肌、信念及友人ノ為ニハ水火モ辞セサル底ノ強キ性格ヲ有スルモ猪突的ナル嫌ナシトセス」などと指摘している。

①七月二二日の須磨電と三〇日の桜井電の時間的な近さ、内容的な繋がり、②桜井電で言及されている情報工作を担っている人物は、桜井のエージェントではないし、後述するように桜井はこの人物からの情報と海軍側の偵察とを比較せよと述べていることからスペイン公使館付海軍武官のエージェントとも考えにくい。なぜなら、海軍のエージェントならば、当然、海軍側が入手している情報と比較するのは自明であるからである。つまり、須磨のエージェントである、③一九四二年七月時点において須磨の情報活動を担ったスペイン人でその種の工作に熟練した人物、以上の点から考えて、桜井電で言及されている情報工作に従事するスペイン人とは、実名こそ登場しないが、ベラスコであると断定して差し支えない。そして、桜井電の冒頭で言及されている須磨電（Suma's wire）は――米側の解読では単数になっているが、特定の単一の電報を指すか否かはわからないが――、少なくともその一部分が七月二二日に須磨から発信された第七八一号であることは間違いない。したがって、桜井電の「この情報（this intelligence）」は、東情報を指している。

続けて、桜井は、現時点で東情報の正確さを保証することができるかも知れない他のソースからの情報を持っていると述べた上で、最終的に、「この情報に対処する上で、日本海軍の偵察の結果と情報を比較することにより、情報の確度を調査することが良い考えであろう（In dealing with this intelligence, it would be a good idea to check up on its accuracy by comparing it with the results of Japanese Navy reconnaissance）」と進言している。つまり、桜井の報告は、ベラスコに依拠した須磨の東情報に関する参謀本部からの照会に回答したものであり、桜井は東情報の信憑

性を調査するために海軍側の情報と比較するように提案していたのである。東京の参謀本部は、外務省経由で須磨からの情報が届いたものの、その情報をどう扱ってよいか逡巡があり、桜井の意見を求めたのだろう。従来、須磨情報と軍の関わりは、専ら中央の参謀本部や軍令部で須磨情報がどう処理されたのかの縦の関係に関心が集まり、現地スペイン駐在の陸海軍武官室と須磨情報との横の関係は等閑視されてきた。須磨が自らの情報活動に関して、どの時点でスペイン駐在の陸海軍武官に告げたのかは不明だが、遅くとも参謀本部から桜井に照会がされた後に、桜井と須磨の間で東情報について協議が行われたことは確実である。[16]

須磨が送った概ね正確な東情報が軍部から軽視又は無視されたケースとして、ガダルカナル戦初期の軍中央の米軍の動向に対する判断の誤りを指摘するのが通例だが、[17]そのガダルカナルに米軍が上陸した一九四二年八月七日の約一週間前の七月三〇日に東情報の確度を巡り参謀本部と現地スペイン陸軍武官でやり取りが交わされていたことを桜井電は示している。この点はこれまで全く知られて来なかった事実である。一九四二年七月三〇日の時点で東情報の確度に確信が持てなかった以上、八月七日以降の米軍への動静判断に東情報を直ちに活かすことは難しかったと思われる。

ガダルカナル戦の初動には東情報を的確に利用できなかったのは確かだが、一九四二年八月二三日にニューヨークから報告された東情報が九月上旬には軍令部第三部長名で海軍の現場部隊に通達されている。[18]したがって、桜井の進言にもあるように、陸軍または海軍は自らの手持ちの情報と東情報を比較し、東情報の確度の判定を行い、ある程度正確性があると判断したので現場の部隊にも知らせたのだろう。須磨からの報告は、その後も作戦指導に影響を与え得る人物の関心を惹いていた。例えば、陸軍省軍務局軍務課長から参謀本部作戦課長に転任した前後に、真田穣一郎は、「3／11馬徳里　スマ公使電　フィラデルフィヤヨリパナマ経由六隻ノ工作船太平洋ニ向フ船尾ニ起重機アリ沈船

引揚用ニシテ修理用器材ヲ搭載ス」という報告を摘記している。[19] 真田の記録でとりわけ注目すべきは、一九四三年一月下旬から二月頃の次の記載である。[20]

谷外相へ　館長符号101　マドリード須
マ公使電（在米諜報網ノ件）
金子電送申度旨　感謝、送レ　□（一字不明）
方針ノ書キ振リハ良イ

従来の研究では米国による解読記録を用いて、一九四三年一月に外務本省は、須磨の要求に基づき米国での情報活動のために五〇万円送金したが、それだけでは須磨の要請額の百万円を満たせず、残りを陸海軍に負担を求めたが、海軍は同意したものの、陸軍は難色を示したことが指摘されていた。[21] 引用した真田の記述は、やや意味が把握しにくいが、その間の経緯を記したものであることは明らかで、須磨のエージェントの米国での情報活動について、軍の情報関係者だけでなく作戦部門の責任者である作戦課長にも報告されていたことを明確に示している。須磨の情報活動に対する陸軍からの資金分与が最後まで拒否されたか否かは判然としない。海軍が資金提供に同意し、陸軍が保留したことからみて、海軍は須磨情報を評価し、陸軍は評価しなかったという解釈が導き出されるかも知れないが、それは必ずしも正しくない。なぜなら、須磨への資金提供が問題となっていた一九四三年一月に参謀本部は、アリューシャンへ輸送船団が向かったというサンフランシスコからの東情報を「信スヘキ諜報」としてアリューシャン方面を担任する北海守備隊に通知していたからである。[22]

一九四三年一月は、外務省が軍へ須磨の情報活動に対して資金供与を求めた以上、当然外務省内部でも須磨情報に関心が高まったと思われる。同年一月九日、日本は汪兆銘政権との間に租界還付、治外法権撤廃を定めた協定を締結

し、汪政権は米英に対して宣戦布告した。この件についても、東情報は次のような情報をもたらしている。[23]

・「東情報
（十一日華府発）
一、国民政府ノ宣戦布告ハ当地ニ激動ヲ与ヘ新聞評論ニモ右気持反映セラレ居リ白亜館〔ホワイトハウス〕ニハ全クノ「サプライズ」ニシテ最近何事カアルヘシトハ期待シ居リタル如キモ斯ル重大決意ハ思ヒモ寄ラサリシ所ナリ／軍部某高官ノ内話ニ依レハ之カ為太平洋作戦計画ヲ改ムル要起ルニ至ルヘク近ク決行ノ筈ナリシ攻勢モ或ハ延期ノコトトナルヤモ知レス〔以下省略〕」

他方、外務省政務局で定期的に作成している国際情勢報告の調書の中で、汪政権参戦に対する米英の反応に触れ、一般的に黙殺的態度で見るべき反応は無いとしつつも、次のように述べている。[24]

「一方情報ニ依レハ国府参戦ハ白亜館ニトリ全クノ「サプライズ」ニシテ最近何事カアルヘシト期シ居レルモ斯ル重大決定ハ予想外ナリトノ感強キ趣ナリ」。両者を比較すれば一見して分かるように、政務局調書中の「情報ニ依レハ」とは、東情報を指している。

しかし、問題はこの情報の信憑性である。汪政権が参戦を日本側に提案していたことは、一九四二年夏の段階で米国側は日本の外交暗号の解読により察知していた。[25]更に、汪政権参戦の一週間前の一月二日付けの米国の暗号解読情報の要約文書でも、東條が南京政府に一九四三年初頭のある時期に宣戦布告させることを決断し、その旨を汪の訪日時に伝えたと指摘している。[26]したがって、東情報が伝えるほどの驚きがなかったことは確実である。また、後段の汪政権参戦により作戦計画が変更されるかも知れないという米軍部高官の話は全く誇張されたものでそのような事実はない。

このように東情報を含めた須磨情報は誤った情報も見受けられるが、次にそのような須磨情報が戦時下の外交にもたらした波紋をみていきたい。

三、須磨情報と欧州和平

（一）米大統領特使テイラーのスペイン訪問

ここからは、須磨がスペインから送った欧州和平に関する情報を巡る二つの事例を取り上げ、須磨情報が日本政府部内にどのような影響を与えたかを検討する。まず、米大統領特使テイラーに関する須磨情報である。

海軍次官の澤本頼雄は一九四二年一〇月六日の日記に、三日付の須磨からの「△和平ノ噂／在西米国大使ノ　Tailor 午餐会ノ際　Tailor ハ Spain ハ平和斡旋者トシテ恰好ノ地位ニアリト漏ラシタル趣ナリ〔後略〕」という情報を記した。続く八日には、五日付の須磨の情報として、「△ Tailor 和平／Tailor 法王庁訪問　ホルダナ外相トノ会談内容　Tailor ハ今カ平和ニ尤モヨシ〔中略〕Spain カ Hitler ニ　仲介申出　米英独伊ノ単独講和ヲス　日本ニ対シテハ別個ニ考フルヲ要シ苛酷ナル条件ヲ強フル気持ナキモ〔中略〕独トノ平和出来レハ日本ノ野心ハ充分制肘シ得ル見込アリト述」べたと記している。このテイラーの提案に対して、ホルダナ（Count Francisco Gómez-Jordana）・スペイン外相はドイツが同意しないだろうと返答したという。以上が、澤本日記に記載されている須磨からの情報である。[27] 要するに、米大統領の特使としてバチカンと米政府との連絡役を担っているマイロン・テイラー（Myron C. Taylor）がバチカン訪問の帰途、スペインに寄り、スペイン政府を仲介として独伊との講和を申し込んだというのである。

米国が和平へ意欲を見せたという須磨からの一連の報告は、海軍だけでなく当然陸軍でも反響を呼んだ。一〇月九日参謀本部で、「午前中昨今ニ於ケル情勢判断ニ関シ第一部第二部合同研究ヲ行フ両部長出席」した[28]。九日の合同研究について、戦争指導を担当する第一部第一五課長の甲谷悦雄は次のように記している[29]。

二、第二部トノ情勢判断懇談会

イ、第二部ヘノ注文

1、須磨公使電ニ依ル米側和平提唱問題ノ観察

2～4〔省略〕

つまり、第一部と第二部との間で、米国が和平を申し入れたという須磨からの情報が俎上にのぼっているのである。一九四二年八月から一一月にかけては、太平洋戦争開戦後の日本の対外情勢認識の基礎となる「世界情勢判断」の審議が陸軍、海軍、外務省で断続的に行われていた時期であり[30]、第一部と第二部の合同研究はその一環である。合同研究自体は、須磨からの報告とは関係なく予定されていたものだが、たまたま須磨からの情報と時期が重なったと思われる。翌一〇日、田中新一作戦部長は、欧州和平について次の三点を指摘しており、須磨からの情報の影響が見受けられる[31]。

10――10欧州和平ニ伴フ措置

1、欧州和平ニ関スル一般的判断

2、欧州和平ニ併セテ起ルヘキ事象ニ関スル判断

日支戦争

日独伊関係

日「ソ」関係

3、欧州和平対策

このように、須磨の情報は陸海軍の中枢にも一定のインパクトを与えたが、その余波は現役、現職ではない指導層にも広がっていった。外務省情報部長や外務次官、イタリア大使等を歴任した天羽英二は一〇月二一日、外務次官時代の大臣で帝大病院に入院中だった豊田貞次郎海軍大将（予備役）を訪問し、「豊田貞次郎、至急面会シタシトテ自動車ヲ寄越ス、病院ニ行ク。須磨来電「アイロンテーラー」西班牙外相ニ平和提議風説ニ付意見ヲ聞ク　近衛公ヨリノ話シラシ　信ジ得ズト答フ　其他雑談　辞去」といった応答を交わしている。[32] 近衛文麿と豊田は二人とも帝大病院に入院しており、近衛から須磨情報を聞いた豊田が天羽に「至急面会」を求めたのは、彼の驚きを表している。天羽が豊田と面会した前日の二〇日、陸相、朝鮮総督、外相等を歴任した宇垣一成は、「過般テーラーが羅馬法王を訪問し帰途西班牙を訪ひ英米対独の講和を提議したりとの噂あり。而かも夫れは東洋の問題は後廻しとするとのことなりと伝ふ。若し夫れが信なりとすれば吾人に至大の波動を与へ来るべく、大に警戒し対策を考へ置かねばならぬ問題である！」と和平から日本だけ取り残されることを懸念している。[33] 宇垣の記述が須磨情報を指していることは明らかだろう。このように、米側が和平の申入れをしたという須磨の報告は、近衛、豊田、天羽、宇垣に伝播していった。後述するように、須磨の情報は外務省のＯＢ会でも取り上げられており、テーラーを巡る須磨情報を耳にした関係者は少なくないものと思われる。

一〇月二一日に豊田から須磨の和平情報を告げられて以降、天羽は外務省関係者と会談し、豊田と近衛に報告をし

た。天羽は一〇月二三日、松本俊一外務省条約局長と「「テーラー」平和提議其他雑談」をし、同日、「豊田貞次郎ニ「テーラー」使命ニ就キ長文ノ手紙ヲ送ル　近衛公ニモ見ルニ便ナル為手紙ト」した。[34] 更に、二八日には外務省ＯＢの集まりである十人会の場で、有田八郎元外相が天羽に「「ティラー」ノ欧州平和運動ノ意見ヲ問」い、[35] テーラーの動向が話題になった。天羽は三〇日、谷正之外相と面会し、「和平運動情報ニ就キ話」した後、帝大病院に入院中の豊田と近衛を訪ね、「西班牙ニ於ケル和平運動ニ就キ谷其他外務省幹部トノ会談模様ヲ話」した。[36] その後、スペインにおける和平運動に関して天羽の日記には記述が見られなくなり、須磨がもたらした情報による衝撃は沈静化したようである。しかし、年末の一二月二四日、天羽は病院に近衛を訪ね、「近衛ト時局談　東条首相ヲ批評　近衛入院ノ際　陸軍参謀本部ハ須磨情報ノ米ノ欧州妥協説ヲ信ジ（「テーラー」「フランコ」談話）近衛ヲ欧州ニ派遣セン為入院中止方申出デシ由」と告げられている。[37] 須磨情報に基づいて参謀本部が近衛の欧州への派遣を計画し、近衛に入院を中止するように要請したという近衛の述懐であるが、そもそも近衛が帝大病院に入院したのは一九四二年一〇月一二日である。この点は、同日、天羽が豊田貞次郎を見舞いに病院を訪問した際の日記に「〔豊田の〕隣室に近衛文麿公、本日入院　帰次見舞ヒ、暫時会談　時局憂慮」と記していることから確認できる。[38]

先に述べたように一〇月九日の参謀本部第一部と第二部の合同研究で須磨からの和平情報が話題になり、一〇日は田中第一部長が欧州和平について検討している。近衛入院は一二日なので、近衛が天羽に語った参謀本部が欧州に近衛を派遣するために入院を止めるように求めたという話は、時系列からみて事実だろう。参謀本部から近衛への要請は、時間の幅をやや広く取ると、一〇月九日から一二日の間に行われたものと思われる。

欧州で和平が成立するか否かの参謀本部を含めた日本政府の見解は、須磨からの和平情報が到着してから約一月後の一九四二年一一月七日に大本営政府連絡会議で決定された「世界情勢判断」にみることができる。「世界情勢判断」

は各地域、国別に記載されており、「米英ノ動向」では、「米英ハ今後情勢ノ推移如何ニ依リテハ独伊トノ間ニ和平ヲ策スルコトナシトセサルヘシ」と述べられ、他方「独伊ノ動向」では「独ハ今後ノ情勢如何ニ依リテハ「ソ」英ニ対シ和平工作ヲナスコトナシトセサルヘシ」とほぼ同趣旨の記述になっている。[39] この表現だけではやや分かりにくいが、「世界情勢判断」には「「世界情勢判断」決定ノ連絡会議席上陸（海）軍軍務局長ノ所要事項説明要旨」が付加されており、その中では、「現下米英ノ独伊ニ対スル戦意ハ愈々強固ナルモノアリト雖モ欧州方面戦局ノ推移如何ニ依リテハ独伊ト和平シ太平洋方面ニ其ノ戦力ヲ集中指向センコトヲ策スルコトナシトセザルベク万一斯カル事態発生セバ帝国トシテハ極メテ重大ナル困難ニ逢着スルコトトナルベシ」とあり、[40] 欧州和平の可能性をそれ程高く見積もっていたわけではない。日本側には須磨の情報とは別に、テイラーのバチカン訪問は和平ではないとする報告も届いていた。バチカン駐在の原田健公使は、訪問は和平が目的ではなく、戦争を徹底的に戦うという米国の決意をバチカンにわからせ、ローマ法王の和平仲介を止めさせることだったと報告していた。[41] 後述する実際のテイラーの言動と照らすと、原田のこの報告は概ね正確なものである。

したがって、参謀本部は天羽の日記の文言から窺えるほど須磨の欧州和平情報を信じたとも思えず、近衛への入院中止要請は欧州が和平へ急転した場合に備えた万が一の措置だったのだろう。とはいえ、須磨からの情報が参謀本部で注目を集め、近衛への入院中止要請にまで至ったことは、一九四二年八月下旬以降、東情報を含めた須磨情報が軍部で認知され始めてきたことを示す好例である。

ここで、実際のテイラーの言動を確認しておこう。[42] テイラーはバチカン訪問後、マドリードに寄り、一九四二年九月二九日、ヘイズ（Carlton J.H.Hayes）駐スペイン米国大使とともにホルダナ外相を訪問し、同日米国大使館で行われたヘイズ大使主催のテイラー歓迎のディナーにはホルダナ外相を含めたスペイン政府要人も参加した。翌三〇日、ス

ペイン側の申し出でフランコとテイラーが会談しホルダナとヘイズも同席した。席上、フランコは次のように述べた。日米戦争と欧州での戦争は異なり、両者は区別しなければならず、後者は共産主義に対する闘争であり、両者を混同してはならない、ヒトラー（Adolf Hitler）は高潔な紳士であり、英国に対する不満や各国の独立を阻害するような考えを持っていない、ドイツ、イタリア、全てのキリスト教世界だけでなく米英の敵は野蛮で東洋的な共産ロシアである。このような主張に対しテイラーは反駁し、米国は日本だけでなく全ての枢軸国との戦争を戦っていることや、ヒトラーは各国の独立や英帝国の一体性を尊重していないこと、共産ロシアではなくナチスドイツが好戦的であることを主張し、フランコもこれらの点を認めた。また、フランコは、ロシアに対する弁護や戦争を勝ち抜く米国の力と決意を強調したテイラーの発言に敬意を払った。

以上のテイラーとフランコとの会談からも分かるように、須磨が報告したような米国側からのスペインへの和平提案などは全く有り得ない。そもそも、テイラーが一九四二年九月にバチカンに派遣された理由の一つは、枢軸国がバチカンを連合国の利益に反する妥協的和平実現のための媒介として利用することに米国が懸念を抱いたからである。事実、テイラーはローマ法王を含めたバチカン側との会談で、枢軸国の完全な敗北を主張し、妥協的和平を支持することにより枢軸国の思うつぼにはまらないように警告した。これに対しローマ法王ピウス一二世は、妥協による和平は考えていないし、キリスト教の基盤を毀損し宗教や教会を迫害する人物たちにさせたいようにさせるいかなる和平も拒否することを約束し、米国を満足させた。[43] 要するにテイラーの発言はバチカンでもスペインでも一貫しており、テイラー及米国政府が何らかの和平の試みをしたことはなかったのである。

しかし、米国の外交官でバチカンに駐在していたティットマンジュニア（Harold Tittmann, Jr.）が回想するように、バチカンでのテイラーの存在は枢軸国の外交官の注目を集め、彼らはテイラーのバチカン訪問の本当の目的は和平の可能性を探ることであると推測していたのである。[44] また、ヘイズ大使によると、テイラー訪問はスペインでも大きく

報道され、ドイツ資本やファランヘ党の新聞は彼の訪問を連合国の和平の申し入れと解釈し、他方より穏健な新聞は、訪問はイタリアを枢軸から切り離し単独講和を締結しようとする米国の試みと理解していた。[45] 須磨の誤った報告は、テイラーの訪問を和平と結びつける観測が広くなされていたことも念頭に置く必要がある。

（二）米独伊和平極秘交渉

一九四三年三月、須磨はベラスコからの情報とスニエル元外相からの聞き取りの結果として、スニエル、そして、イタリア外相からバチカン大使に就任したチアノ（Galeazzo Ciano）、ドイツ外相のリッベントロップ（Joachim von Ribbentrop）、ローマ訪問中の米国のカトリック教会の有力者であるスペルマン（Francis Spellman）の四者が極秘裏に和平交渉を行なったと報告した。この件は先行研究でも米国の解読記録を用いて事実関係は言及されているが、[46] ここでは、須磨の情報の――勿論、四者会談自体は虚報であったが――、与えた影響を考察する。

この四者会談を報告した須磨から外務省に宛てた電報は現存していない。しかし、須磨がスペイン在任中に記した「塞翁ヶ馬」という表題の手記の中に四者会談に言及している箇所がある。[47] 以下、この手記に拠りながら行われたという会談の内容を確認していきたい。「その二月二十五日スニエルはチアノ□□（二字不明）さし廻した特別飛行機でローマに直行、チアノ宅に陣取つて三月一日同じ飛行機で帰路につき同日バルセローナ一泊、二日に馬徳里に帰つた。その間二日間パラシオ・ヴエネチアで歴史的大会談が行はれた。チアノ、リツベントロツプそれに米国の代表者、名前は言はないが、宛も当時ヴァチカンにあつたスペルマンであつたとみられる。〔中略〕要するにその会談は二日にわたつたが、チアノが司会し、米国大使館を通して米国政府の意向が明らかになつたからと前提して、次のやうな欧州の休戦に関する提議をなし、結局白人種が東洋への戦争を新たに起す準備とみらるべき趣旨を述べたものであつた」とし、米国政

府からの提議の内容を次のように述べている。

「（一）欧州と太平洋とを切り離し欧州のみの休戦を速やかに実行すること
（二）仏領アフリカは大体米国に於て占領し、シレナイカ、リビア、スエズ地方は英国に於て占領すること
（三）米国はソヴイエツトとの関係を場合に依つては清算し、反共の宣伝をなすの用意あること」

この米国側の提案に対してリッベントロップは、

「（一）全世界の休戦ならば兎も角、日本と手を切る訳にはゆかない。のみならず太平洋は日本に任すべきものであると確信する
（二）北阿に対する米英の支配を認める訳にはゆかない。またスエズ地方はドイツに於てあく迄支配したい。爾余の諸地方イタリア及スペインに於て処理させたい」

と述べ提案を断ったという。須磨は、「結局　東洋と西洋との切離しが不調になつたため会談の根本的趣旨が通じず、物別れになるのであつたが、会談中和気藹々として、また何時でも話合をする空気が読まれてゐた。最も相異した点は日本切離しに関する一点にとどまつてゐた」と指摘し、最終的に「この話が実を結ぶかどうかは一向に見当がつきえないのだが、スニエル帰馬〔馬徳里〕の翌日即ち三日筆者に語つた処によると『イタリアはもう戦争に飽きてゐる。その脱落だけは既に確定的な事実とみる方が宜しい』と言つてゐた」。以上が、須磨自身が記したリッベントロップ、チアノ、スペルマン、スニエルの欧州和平を巡る四者会談の概要である。

ドイツ、イタリアが日本と相談なく米国と和平交渉を行っているという日本にとって不利な情報は、早速、日本政

府上層部の関心を惹き、海軍次官の澤本も一九四三年三月一〇日の日記に「和平　18－3－5　須磨発」と題して四者会談の内容を一三行に亘り詳細に書きとめている。[48]

須磨電が与えた影響を考察するために、まず当該時期に日本政府が欧州での和平の実現可能性についてどのような判断をしていたのかを押さえておく。一九四二年一〇月「遣独伊連絡使派遣ニ関スル件」が採択され、ドイツとイタリアに駐在する大使や陸海軍武官との連絡のための人員の派遣を決定し、翌一九四三年一月陸軍、海軍、外務省から連絡使が任命され、連絡使の団長には陸軍から岡本清福が就いた。二月二〇日の連絡会議で、連絡使が携行するために「世界情勢判断」の作成が行うことが決定し、二月二七日には、前年一一月以来の「世界情勢判断」が連絡会議で決定された。一九四三年二月は、日本のガダルカナルからの撤退やドイツのスターリングラード戦での敗北など、戦局が枢軸側に非常に不利な状況に陥っていた時期である。一九四二年一一月と一九四三年二月の「世界情勢判断」を比較すると、欧州和平に関し、一一月は「米英ノ動向」、「独伊ノ動向」という項目の中で欧州和平の可能性に言及するだけだったが、二月のものは、新たに「欧州和平」という独立した項目が追加され、そこでは、「現下ノ情勢ニ於テハ独「ソ」、独英間ニ何レノ側ヨリモ和平ヲ提議スルノ公算少キモ戦局ノ推移ニ伴フ今後ノ動向ニ関シテハ注視ヲ要ス」と述べられている。[49]「欧州和平」という項目を独立させて記述したことからも看守できるように、欧州和平の可能性は少ないとはいえ、一九四二年一一月時点より一九四三年二月は、その可能性が増大していると日本は判断していたことになる。この点は、「世界情勢判断」が決定された同日、大本営陸海軍部で了解した「世界情勢ノ推移ニ対スル更ニ将来ニ渉ル突込ミタル質疑ニ対スル応酬要領」の中で、「戦争ノ持久化ニ伴ヒ政謀略ハ漸次活発化シ独米英「ソ」間ニ和平妥協ノ策謀ヲ見ルコトナシトセサルヘシ」と触れていることからも理解できる。[50]

また、一九四二年一一月の「世界情勢判断」では中立諸国について、スペイン、ラテンアメリカ諸国は同年三月の

「世界情勢判断」と変化なしとされたが、翌年二月のそれは、スペインについて「西ハ極力中立維持ニ努ムルナラン」と改変され、新たに「羅馬法王庁ノ動静ハ注視ヲ要ス」という文言が追加され、バチカンへの関心が増大したことを示している。スペインやバチカンについては東条英機首相も関心を持ち、「世界情勢判断」決定時の二月二七日の連絡会議での席上、東条はスペインの中立維持は日本に好意的なものか、それともやむを得ないものか、日本に対して好意的な態度が希薄となりつつあると観察しているがと発言し、議場一般は、好意的態度は逐次稀薄となりつつあると返答した。更に、東条は「羅馬法皇ノ動向ハ単ナル和平運動ナリヤ、或ハ余程大ナル力ヲ背景トシテノ動キナリヤ」と述べ、陸軍省軍務局長佐藤賢了は「単ナル和平運動ナルヘク大ナル指導力ハ無キモノト観察シアリ」と応じており、さほど重視はしていないが、一応バチカンの和平運動を気にかけている様子が窺える。[51]

昭和天皇が日米開戦前に、戦争終結を見据えてバチカンとの関係に留意していたことは比較的良く知られているが、[52]日本は一九四二年三月、バチカンに公使として原田健を任命し派遣した。「世界情勢判断」が決定された一九四三年二月二七日の前後にはバチカンが和平工作に何らかの形で関与するのではないかという憶測を生む二つの出来事が発生した。それらは、須磨の四者会談に登場するチアノとスペルマンの動きである。

まず、イタリアの外相でムッソリーニ（Benito Mussolini）の娘婿でもあるチアノが、外相を辞任し、バチカン駐在大使に就任したことである。二月七日にチアノの大使就任が公式に発表された後、イタリアがバチカンを通じて連合国側と交渉を開始するのではないかと噂された。[53]他方、チアノの外相辞任については、ドイツの要請によるものであるというリスボンの森島守人公使からの報告や、[54]駐イタリア大使館からは、チアノを含めた二流の人物で構成されているという理由で内閣は批判され、内閣の人員の入れ替えは噂されては立ち消えになってきたが、状況が切迫し国民を宥めなければならなかった、という観測もなされた。[55]また、バチカンの原田健公使は二月八日イタリアの外交官か

らの極秘情報として、チアノのバチカン大使任命をバチカンを和平に関与させるというイタリアの政治的企みと見なすべきでない、と説明されたことを本省に報告している。[56] 総じて欧州に駐在する日本の外交官からの報告は、チアノのバチカン大使転出とイタリアの和平問題を必ずしも結び付けてはいなかった。

ここで、チアノの外相更迭とバチカン大使就任の経緯を確認しておきたい。戦況の悪化もあり、チアノは連合国側との和平に積極的なグループの一員であり、外相在任時からバチカンを和平に利用することも考えていた。外相更迭時にいくつかのポストを提示され、バチカン大使就任を選んだ。大使就任後も連合国との和平を試みたが成功しなかった。[57] チアノ個人が和平を希求していたことは確かだが、外相辞任自体はあくまで更迭であったことは留意する必要がある。

次にバチカンと和平との関連を想起させた出来事として、米国カトリック教会の有力者でニューヨーク大司教かつ枢機卿でもあるスペルマンのバチカンを含めた各国歴訪である。とりわけバチカン訪問は連合国とイタリアとの和平の兆しではないかという憶測を生み、スペルマンの動向はメディアでも大きく取り上げられた。スペルマンは一九四三年二月九日ニューヨークを発ちリスボンを経由し一二日マドリードに着き、一六日フランコと会談、二〇日にローマに到着し、三月三日迄滞在し、その後、英国、北アフリカ、中東を歴訪し、八月一日、米国に帰国した。[58]

日本の外務省は二月一八日、欧州駐在の在外公館に宛ててスペルマンの動向を探るように訓令を出した。[59] 二月二五日スペインのホルダナ外相は須磨公使に対して、スペルマンのマドリード滞在中に会談したが、マイロン・テイラーとは異なりスペルマンは和平に関心はないが、米国の対ソ連援助が継続すれば、今年中にドイツは講和を申し込むかも知れないと発言していた、と説明している。[60] 二月二六日にバチカンのマリヨーネ（Luigi Maglione）国務長官は原田公使へ、スペルマンの目的は宗教関連で、いかなる政治的ミッションも帯びていないが、スペルマンはローズヴェル

ト（Franklin D. Roosevelt）大統領と親しい関係なので、結果的にスペルマンが法王の口頭の伝言を大統領に伝えることは不可能ではないと述べた。原田は、このマリヨーネの発言や、イタリアの外交官、フィンランド公使等の見解を加え、迷いながら、あえて自らの所見として、スペルマンはテイラーと同様にローマ法王の意向を探り、米国の立場を説明する任務を有していると報告している。[61]

ところが、三月に入り、スペルマンがローマを発った後、原田の情勢判断は変化する。三月九日付けで、バチカン駐在のドイツ外交官との会談内容を伝え、その中で、ドイツ外交官のスペルマンのバチカン訪問は宗教的なもので、全般の状況に余り影響せず、さほど注意を払う必要はなく、その旨ドイツ本国に伝えたという発言を紹介している。[62] ドイツ側のこのような発言に影響を受けたのかも知れないが、原田は三月一一日最終的に、テイラーのバチカン訪問とは異なり、スペルマンは具体的な提案を持ってきておらず、観察者として行動した、具体的な成果を生み出すことを意図した政治的討議は行われなかったことが一般的に認められている、と本省に報告した。[63] 要するに、原田はスペルマンのバチカン訪問について二月下旬では一定の政治性を帯びたものと見なしていたが、三月に入り政治性の薄いものである、と考えを変えたのである。

スペルマンがまだローマに滞在している時の二月二七日に決定された「世界情勢判断」に「羅馬法王庁ノ動静ハ注視ヲ要ス」と新たに追加された背景には、これまで述べたようなチアノやスペルマンの動きがあったことは十分に考えられるし、後述するように陸軍の一部ではチアノやスペルマンの動向に多大の関心を払っていた。いずれにしても、バチカンの動向が一定程度注目され、チアノやスペルマンの動きに注意が払われている時の三月初旬、まさに渦中の人物であるチアノとスペルマン、そして、リッベントロップ、スニエルの四者が極秘裏に会談し和平協議を行ったという須磨からの情報が飛び込んで来たのである。前述したようにスペルマンは二月二〇日から三月三日迄ローマに滞

在し、同時期にドイツの外相であるリッベントロップも二月二四日から二八日迄ローマを訪問し、ムッソリーニと会談し、チアノとも会談した。[64] つまり、スペルマンとリッベントロップは同時期に共にローマに滞在していたのである。それ故、リッベントロップとスペルマンが会談したという須磨情報は、一見尤もらしく見えたのである。また、三月八日、原田健がバチカン大使就任後のチアノと初めて会見した。その際、チアノは、バチカン大使就任は自らが希望したものであり、バチカンはイタリアにとりかつてなく重要で、比類ない役割を果たすことになるだろうと述べ、リッベントロップのローマ来訪時に会談したことなども話した。[65] バチカンの役割を強調したチアノの発言は、バチカンが欧州での和平工作に関与するのではないかという日本側の懸念を増幅させた可能性もある。先に引用した澤本海軍次官の日記によれば、須磨の四者会談の報告は三月五日に発信され一〇日には澤本に到達しているが、チアノの発言を報告した原田電も同時期に東京に達していたことになる。

須磨の報告を受けて外務省ではベルリン、バチカン、ローマの在外公館に、須磨からの情報をチェックするように訓令し、駐独大島浩大使はリッベントロップと会見した。その内容は、三月一五日付けの澤本次官の日記によれば「独外相和平会談否定　3－13th――大島報　「リ」外相ハ四人会談ノ話頭カラ一笑ニ附シ米人ト会談セル事実ナキコトヲ確言シ又「ム」首相モ伊政府ノモノカ会談セルコトナシト確信セリ」というもので、[66] 独伊が米国側と和平協議を行ったことを完全に否定した。ドイツが日本に相談なく米国と和平交渉していたという須磨の情報は、枢軸派の中心人物である大島大使を狼狽させ、大島は須磨の情報に対し激しく憤った。大島は須磨の四者会談の情報は、スペインでの情報収集において日本が果たしている役割を認識している米英のエージェントが巧みに仕掛けたものであり、スニエルが親枢軸の立場から米英寄りに転向したのではないかと疑い、スニエルの政治的立場とイデオロギーを徹底的に再調査するように求めた。[67] 更に、もし須磨の情報が正しければ、日本は対独関係の再考を迫られる、だからこそ、この須

磨からの情報を外交上の諜報網を犠牲にしてでも調査し、本当の事実を得るように尽力し、将来の情報収集のためといって、曖昧なまま放置するのは本末転倒だと訴えた。[68] 須磨の四者会談に対する大島の主張は、それ自体だけをみれば正当なものであるが、元来ドイツ寄りの大島の発言は割引いて受け止められた側面もある。外務省戦時調査室委員長の石射猪太郎は大島の反応について、「「スニエル」情報で大島八ツ当りをする。鳥の雌雄は一概に断ずべからず」と日記に記しているが、[69] 大島に対して冷ややかであり、須磨の情報を完全に信じたわけではないだろうが、ドイツと連合国側との和平協議の可能性を捨て切れていない様子が看守される。

一九四三年三月初旬に欧州の在外公館から齎された欧州和平の動きは、須磨だけではなく、ブルガリアの山路章公使からも来ていた。昭和天皇は三月三日、木戸内大臣と「ソフィア山路公使電、英独和平云〻につき御話あり。バルカンが宣伝戦の中心地となれる現状、其他につき御話申上ぐ」というやり取りをし、[70] 同日、蓮沼蕃侍従武官長に対しても「本日ソフィア山路公使電ニ英独和平説出デアルガ、参謀本部ハ之ニ対シ如何ニ考ヘアルヤ」と述べ、[71] 木戸と蓮沼の側近二名に山路電への関心を語っている。

一九四三年二月末の「世界情勢判断」では欧州和平の可能性が増大したと考え、三月に入ると山路や須磨からの情報が寄せられ、欧州和平が万が一実現した場合について日本政府は検討せざるを得なくなった。例えば、三月二二日、企画院では「欧州和平問題ノ動キト帝国ノ対策」を起案した。[72] 結論は、枢軸国の建直しが主眼で、「独伊トノ交誼ヲ一段ト緊密ニシ枢軸三国ノ結束ヲ鞏固ト為スヲ要ス」、「独伊ヲ我カ薬籠中ノモノトスルヲ心掛クヘシ」と指摘し、独伊と米英間で欧州のみの和平が成立しそうなら、「「ソ」連ニ対抗スル全面和平ヘト形勢ヲ馴致スルニ努ムルヲ要ス」と述べつつ、ソ連との対抗とは正反対の「「ソ」連ト結ンデ白人国家ノ圧迫ニ対抗スルノ途ヲ撰ブ」という選択肢も提示している。この時期既に企画院の一部で、状況によってはソ連との提携が考えられていたことは興味深い。

そして、三月二五日、大本営陸軍部戦争指導課では、「独伊対米英間ノ和平工作ニ対シ帝国今後ノ戦争終末指導方策トシテノ施策ヲ課トシテ研究スルコトヲ発意シ其ノ内容ヲ概ネ左ノ如クスル様課長〔松谷誠〕、種村〔佐孝〕中佐間ニ決定」した。[73] ここで重要な点は、独伊と米英間の和平工作への対抗策として日本側の戦争終了計画が立案されたということであり、日本側の自主的な動きではないということである。独伊と米英間で和平工作が行われているという認識が陸軍にはあったのである。こうして作成されたのが、先行研究でもしばしば言及されてきた、種村起案の「帝国ヲ中心トスル世界戦争終末方策（案）」である。[74] ここでは、この史料の中の「和平工作ニ対スル英米ヘノ路線ノ設置」と題された箇所を検討してみたい。まず、「和平工作ノ準備ハ政略的ニ謀略的ニ大イニ行ヒ其ノ気運ノ醸成ニ努メ機微ノ間ニ処シテ之カ工作実施ニ着手セサルヘカラス」として、英米への和平工作へ吝かでない姿勢をみせ、「世界戦争指導ノ主動権ヲ把握スル為之カ路線ノ速カナル設定ニ努力スルハ当然ナリ「スペルマン」ノ訪伊「チアノ」ノ「バチカン」使節等々戦争指導上ノ奥義タルヘク」と指摘し、スペルマンとチアノの動きを和平工作の布石と看做している。続けて、スペルマンとチアノの動向を「一笑ニ付スルモノノ愚ヲ笑ハサルヘカラス事茲ニ至レハ帝国遣欧使臣ノ低劣我外交使陣ノ貧弱ヲ嘆クノミ／茲ニ於テ独伊トノ連絡ヲ更ニ緊密ニスルノ他諜報網ノ拡充強化特ニ有力ナル政治工作網ノ新展開ハ速カニ実行スヘキ緊急事項トス」と述べている。要するに、スペルマンやチアノの動きを「戦争指導上ノ奥義」とさえ形容する種村が、彼らの動向を軽視している欧州駐在の外交官を批判しているのだが、ここで批判の対象になっている外交官の中にはスペルマンのバチカン訪問は観察者で政治的任務は無いと報告した原田健も含まれていると思われる。原田の報告とは対照的な須磨の情報は、全て信じられたとは考えにくいが、独伊と米英間で何がしかの和平工作が行われているという認識を日本側の一部に植え付ける方向に作用したと言って差し支えない。

三月三〇日、戦争指導課の案を基礎として、陸軍省と参謀本部の幹部間で「速カニ世界戦争終末方策ニ関スル準備

ヲナス」ことが決定された。[75] その日の大本営陸軍部戦争指導課の日誌は、「「スペルマン」ノ訪伊、「チアノ」ノ「バチカン」使節任命、「リッペン」ノ訪伊等「バチカン」ヲ中心トスル欧州内幕ノ動キ機微〔微〕ナルアルトキ帝国独リ拱手傍観シアルノミニシテ為ストコロナカランカ　欧州局部和平カ大東亜戦争ト別個ニ成立シ帝国ノ運命絶望ノ深淵ニ放チ込マルル危険ナシトセサルヘシ〔中略〕欧亜連絡飛行実現セハ戦争指導上益スルトコロ極メテ絶大ナルモノアラン」と述べている。[76] この箇所も、終戦研究の開始のきっかけが欧州でのみの和平実現を恐れたからである、という文脈でよく引用される。[77] にも関わらず、先行研究はスペルマンやチアノの動向について論じるところがほとんどなく、とりわけ、彼らの動きに関して在外公館がどのような情報を送ってきたかについては等閑視されてきた。それ故、本稿ではそれらの点についてやや詳細に説明してきたのである。

戦争指導課は、単にチアノがバチカン大使に就任した、スペルマンやリッベントロップがローマを訪問した、枢軸国に戦況が不利になったという外形的な事実だけ判断していたのではなく、公式、非公式の種々の情報を基に判断していたことを念頭に置く必要があり、その中の一つに須磨情報があったのである。

須磨の情報が意味を持ったのは、内容が内容だけに大島大使がリッベントロップに対して照会を行いドイツ側の反応を引き出したことである。戦争指導課では一九四三年四月一八日付けで「戦争指導ノ見地ヨリ独（伊）首脳者ノ言ニ関スル再検討」を起案した。[78] この文書は、一九四一年一一月下旬から一九四三年三月までの間、ドイツ指導層（ヒトラー、リッベントロップ、軍首脳等）が日本側との会見で何を語ったかを記し、かつドイツ側の発言とその後の行動について詳細に分析したものである。その最後に、須磨情報を受けて行われた大島・リッベントロップ会談の要旨が記載され、澤本海軍次官の日記同様、「「リ」ハ「スペルマン」其他如何ナル米人トモ会談セルコトナシ（伊訪問）」、「最後ノ勝利迄戦ヒ抜カントスル決意ニハ啻ニ独ノミナラス伊太利ニモ疑ヲ挟ム余地ナシ」というドイツ外相の発言が

記載されている。重要なのは、「綜合判決」という項で戦争指導課の所見を述べているが、そこで「対米妥協ノ色ハ当初ヨリ濃厚ナリ」とドイツの態度を指摘していることである。ドイツの否定にも関わらず、独米和平の可能性を陸軍の一部が払拭できていないことを示している。

ここまで論じてきてことを要約すると、一九四三年の二月のチアノのバチカン大使就任、スペルマンのバチカンを含めた各国歴訪により、戦況の悪化とも重なり、日本側は欧州局部和平実現の可能性が増大したと考えた。そして、三月に入ると、須磨や山路からの欧州和平に関する情報が相次いで東京に達し、日本側でも米英と独伊間の和平が実現した場合の対策をせざるを得ない状況に立ち至った。この過程で須磨の四者会談情報は全面的に信用されたわけではないが、一定の影響を陸軍に与えたということが言える。

四、スペインを通ずる和平企図

第二次大戦中欧州の中立国は情報活動が活発だっただけでない。日本と欧州は距離があったとはいえ、中立国は連合国と枢軸国双方の人物が往来できた関係上少なくない和平工作あるいは終戦工作がスイス、スウェーデン、バチカン等で行われたことは良く知られている。では、スペインはどうだったのだろうか。結論から言うと、東京の外務本省では可能ならばスペインでの英国との接触を検討したが、須磨が本省の思惑通りに動かず失敗に終わり、スペインでは実のある和平への動きは見られなかった。以下、その経緯を述べる。

そもそも第二次大戦中の中立国スペインを外交上何らかの形で利用することは日本の指導層の一部では考えられていた。例えば、吉田茂は一九四三年七月二七日東久邇宮稔彦王を訪ね、陸海軍の作戦が行き詰まり、外交により現状

を打開しなければならず、「我国はおそまきながら、近衛公爵に適当なる随員を付けて欧州に派遣し、スペインに滞在せしめて、将来の平和問題に対策せしめざる可らずこの度の世界戦争の平和交渉には、我国は指導的立場に立たざる可らず」と近衛のスペイン行きを提案している。[79] また、重臣の若槻礼次郎は一九四四年二月東條首相と面会した際に、「……平和の端緒を掴む必要がある。英国がスペインにホーアを派しているのは、大いに含みがある。日本もその端緒を掴まねばならぬが、それにはヴァチカンなども大事だと述べた」。[80]

実は一九五二年四月に刊行された回想録の中で戦中期の外相だった重光葵は、日本が和平を申し入れるには仲介者を通じて直接米英の意向を探るのが有利だったとした上で、「記者〔重光自身を指す〕は、その方法として、英国の有力なる閣員代表者の駐在してゐたマドリッドを選んだこともあるが、これも思ふようになら」なかったと述べていた。[81] 重光は公刊した手記ではスペインを和平に利用しようとした点は、引用した箇所以上は述べておらず極めて短いものとなっている。しかし、手記が刊行された一年前の一九五一年四月、外務省の若手事務官が満州事変から太平洋戦争終結迄の日本外交について「日本外交の過誤」という調書を作成した際に所見を求められ重光は、スペインを通じた和平について次のように回顧している。[82]

そこで、次はマドリッドでやろうと思った。当時マドリッドには、イギリスのサー・サミュエル・ホアー〔Samuel Hoare〕という保守党の有力者のが大使として来ておる。又ロイターのチャーンスラー〔Christopher Chancellor〕がおり、この人達を自分は少し知っていたので、話の相手にすることが出来るかも知れないと考えた。又自分の方は須磨弥吉郎という有能な人が公使でいたので、これに電信をやった。ところが、まことに残念なことに、須磨は全く意見を異にしており、「少し我慢すれば欧州の方もドイツの大勝におわる」ということで強く断って来た。

こちらから打つ電信は自分かぎりで出せるが、向うから来る電信は省内に配布されるので、この時は実に困った。あとで誤魔かしの電信をやったりした。

公刊した手記とは異なり、公開を前提としない外務省内部での発言ではホーアや須磨の実名を挙げ、和平交渉に消極的な須磨を批判する踏み込んだ内容になっている。海軍で政治工作を担当していた高木惣吉の一九四四年九月のメモには「チヤンセラー（ロイテル）リスボンニ現ハレ、スマ〔須磨〕ト touch ス」とあり、[83] 重光の回想を部分的に裏付けている。重光の秘書官を務めた加瀬俊一も戦後の回想録で須磨を名指しこそしていないが、一九四四年に重光はマドリードのホーアを通じて英国政府と接触しようとしたが、現地のスペイン公使館が役に立たず成果を生まなかったと指摘している。[84]

スペインを通じた和平工作という考えを重光や加瀬は、遅くとも一九四四年七月には抱いていた。同月三一日、近衛文麿、細川護貞、加瀬の三名の会食時に「加瀬君は転換の場合、やはり英と話し合ふ必要ありと云ひ、その意味に於て、スペインに人物を派遣したく思ひ居るも、ソ連が容易にヴィザを出さず」、とソ連からヴィザの発給を拒否されている現状を述べたのに対し、近衛は「ホアーと親交ある松平宮相を派しては如何と云はれ、加瀬亦賛成したるも方法に於て窮」していた。[85] 和平工作の文脈で重光がスペインに着目した理由は、スペイン政府の政策や仲介ではなく、当時のスペイン駐在英国大使がホーアだったことである。若槻、重光、近衛の三人ともホーアに言及しているが、ホーアは外相等を歴任した英国政界の重鎮であり、近衛が「ホアーと親交ある松平宮相」と形容したように、一九三〇年代に駐英日本大使を務めた吉田や重光もホーアに関心を寄せたり、接触していた。[86] 特に重光は、首相を務めたネヴィル・チェンバレン（Neville Chamberlain）、外相や駐米大使を歴任したハリファックス卿（Viscount Halifax）、外務政

務次官や文部大臣を経験したバトラー（Richard Butler）、そしてホーアを純正保守派と呼び、このグループは「東亜問題でもシナより日本を重ん」じている一方、首相のチャーチル（Winston Churchill）、外相のイーデン（Anthony Eden）、ダフ・クーパー（Duff Cooper）などのグループを理想派、急進派、米国派、ソ連系であり、中国支持であり、「革新的反逆者であり、赤化せる保守派」と形容し批判的に回顧している。[87] つまり、重光は彼のいう「純正保守派」の一人であるホーアがスペインにいることに和平の可能性を見出したのである。スペインでの須磨の行動について、一九四四年九月一四日、重臣の一人の岡田啓介は「「スペイン」駐箚英大使ガ須磨ニ会ツタト伝ヘラルルガ内容ニハ大シタ問題ガナカツタ様ニ外務デハ謂ツテ居ル」と発言し、[88] 須磨とホーアが会見したことになっている。他方、同月二六日、木戸内大臣は重光外相との会談の際に、「内府　近エ公ノ言動　本間（首相ノ使）ニ対シ西班牙ニ於テ英国ト連絡セサル須マノ態度ハ不可ト述ブ　内府ヨリ注意」と述べ、[89] 近衛が小磯国昭首相の私的な情報収集係を担っている本間雅晴に対して、須磨が英国との連絡を怠っていると非難している旨を伝えている。木戸が言及した近衛の発言では、須磨は英国側とは連絡していないことになっていて、戦後の重光の回想と同趣旨になっている。

木戸の発言の背景を解説すると、一九四四年九月下旬、小磯首相は近衛に貴族院議長就任を薦め、自身が近衛と面会するだけでなく、近衛との連絡役に本間を使い手紙のやり取りも行った。近衛は貴族院議長の再度の就任に消極的で拒絶の理由を複数挙げ、その中の一つとして、「自分としては此の際、欧州殊に西班牙辺りに派遣せらるゝことも、むしろ希望する位なり」と、スペイン行きの希望を小磯や本間に告げていた。[90] この本間と近衛の交渉の際に、木戸が述べた「西班牙ニ於テ英国ト連絡セサル須マノ態度ハ不可」という近衛の発言がなされたものと思われる。ところが、近衛のスペイン行きを聞いた重光外相が外務省に何の相談もなくそのような発言をするのは好ましくないと不快感を持っていることが、寺崎英成から近衛に報告された。これに対して近衛は、スペイン行きは加瀬秘書官の発言にヒン

トを得たもので、貴族院議長就任を断るための理由を多く挙げたものだ、と弁明するように女婿でもある細川護貞に要請し、一九四四年一〇月四日、細川は重光外相と面会し近衛からの伝言を伝えた。その際、重光は細川に、「公が外国に行くとのことは、木戸内府より話ありたりと」述べたが[91]、この重光と木戸のやり取りは前述した九月二六日に行われたものだろう。

近衛が内心どの程度スペイン行きを望んでいたかはともかく、九月二六日の木戸と重光の会談で重要な点は、須磨を介して英国側と連絡を取るという考えが外務省内部だけでなく天皇の側近でもある木戸内大臣にも達していたことである。この会談時、重光に対して「内府ヨリ注意」がなされたのは、ホーアを通じて英国とコンタクトを取るという考えを近衛が不用意に本間に話したことに懸念を持った可能性もある。

それでは、英国側との接触という重要な役割を期待された須磨は、戦争の行方についてどのような考えをしていたのだろうか。前述した重光の回想では、須磨が自らの思惑通りには動かなかったとしている。須磨は一九四四年八月下旬に長文の意見具申を寄せ、その中で、「…而シテ帝国ヲ目ノ敵トスル米英ノ野望ハ最小限度帝国ヲ東亜ノ安定勢力タリ得サルノ境涯ニ押込メントスルニアルヲ以テ前記独逸ノ場合ニモ増シテ妥協ノ余地等アリ得様筈ナシ自然米英ノ意図ハ帝国ノ東亜ニ於ケル存立ト両立セサルノ事実ハ常ニ忘ルヘカラス」と、日本の米英との妥協はドイツより難しいと指摘し、「…太平洋上ノ二、三ハ問フ所ニアラス寧ロ仮ニ敵カ本土ヲ襲フコトアル場合ニモ敵ノ最モ恐怖スル自爆、玉砕ノ武器ヲ以テ一億国民粉トナル迄神州ヲ守ルヘキハ勿論ナルモ更ニ帝国ニハ大陸ニ子邦満洲国ノ在ルアリ更ニ中国大半ノ占領地域在スルノ概ヲ以テ最悪ノ場合ハ我ハ大陸ノ堅塁ニ立籠リ長期戦ニ入ルモ断シテ屈セサルノ決意ヲ為サンカ是正ニ敵カ危惧ノ肺腑ヲ突クモノニシテ斯テコソ漸次敵ノ戦意ヲ砕キ結局ハ敵ヲシテ頭ヲ垂レシムルノ術トモナルヘキ」と、本土決戦での自爆、玉砕や中国大陸での持久戦さえも唱えていた[92]。須磨はこのような考えを終戦

の頃まで抱いており、一九四五年六月時点で須磨が著した「報国憂記」の中では、「……今次戦争の実相を眺め飽く迄決戦を続くるの覚悟なかるべからず」、「而して敵の虞るゝ大和魂は極言せば、日本精神は軍事的一時の退散に依りて粉砕せられざるは勿論一層その闘魂を増し、強力なる進展を結果すべきは歴史に徴して謂ふを俟たず」、「さればとて一日と雖も一瞬と雖も過早に敵と話合ふが如きは許すべからず、最後の抵抗迄推進する処に将来の大展開あるを想はざるべからず」と徹底抗戦を唱えていた。[93] 第二次大戦中に欧州に滞在していた日本の外交官は一刻も早い終戦を望み、祖国の現状を憂いていたと考えられがちだが、須磨に関していえばそうではなく、むしろ陸軍の継戦派と同じような考えを持っていた。だからこそ、重光の指示に従わず、彼の批判を招いたのである。このような考えを持つ須磨が和平交渉の瀬踏みを英国側とするのは不可能であったことは容易に理解できる。須磨がホーアと会見したという岡田啓介の発言は何らかの錯誤か、仮に両者が会ったとしても実のある話があったとは考えにくく、近衛や重光が批判したように須磨は英国側との連絡を忌避したというのが実態だろう。

太平洋戦争の終結を念頭に行われた戦時下の日本外交はソ連を軸として行われた。一九四四年には、北樺太の石油・石炭利権返還の議定書や漁業条約に関する議定書を締結し、戦況の悪化とともに日本がややもすると一方的に対ソ接近を図ってきた。一九四四年七月には小磯内閣が成立し、八月一九日の御前会議では「「ソ」ニ対シテハ中立関係ヲ維持シ更ニ国交ノ好転ヲ図ル／尚ホ速カニ独「ソ」間ノ和平実現ニ努ム」と決定された。九月四日には、最高戦争指導会議でソ連に特使として広田弘毅の派遣が決定した。だが、独ソ和平斡旋はドイツ側から拒絶され、特使派遣もソ連から断られた。にもかかわらず、九月二八日、最高戦争指導会議で「対「ソ」施策ニ関スル件」が決定され、「日「ソ」間ノ中立的態度ヲ維持シ進ンテ国交ノ好転ヲ図ル。独逸ノ崩壊又ハ単独和平ノ場合ニ対処スル為メ「ソ」ヲ利用シテ情勢ノ好転ニ努ム」という方針が示された。[94] ソ連への過大な期待に基づいた外交は一九四五年八月のソ連参戦直

前まで続き、「幻想の外交」として厳しく評価され、批判は軍部だけでなく米英とソ連が離間可能であると判断した重光にも向けられた[95]。

しかし、対ソ傾斜がより鮮明になった一九四四年七～九月にかけて重光は、須磨を利用しホーアを通じ英国との接触を試みようとしていたのである。要するに、重光個人は、対ソ工作とスペインを経由した対英工作を同時並行しようとしていた。さらに、これら二つ以外のルートも重光は検討していた。この点は、重光が同年九月下旬から一〇月にかけて記した覚書に、「陛下ノ松岡評　九月廿六日　尚スマ和平運動新〔現〕ハル　和平問題①スマ　②ゴルゼ―堀田　③バチカン　④バッゲ」と記していることからも裏付けられる[96]。ここで重光は、和平に関して四つの経路を列挙しているが、最初の「スマ」は勿論須磨弥吉郎のことで、二番目の「ゴルゼ―堀田」とは、堀田正昭（元欧米局長、イタリア大使）を通じカミーユ・ゴルジェ（Camille Gorge）駐日スイス公使に接触させていたことを指す[97]。三番目の「バチカン」は文字通りバチカンを指し、四番目の「バッゲ」とは駐日スウェーデン公使のバッゲ（Widar Bagge）を指す。九月一五日、朝日新聞の鈴木文史朗は旧知のバッゲと会見し、スウェーデン政府の斡旋で英国に和平条件を打診することを依頼していた[98]。この鈴木の動きが重光に達していた可能性も十分考えられる。これら四つのルートは中立国を通じて連合国側の意向を打診することが目的だったのだろう。冒頭の「陛下ノ松岡評」とは、前述した九月二六日に木戸と会談した際に彼から、ドイツ屈服時に日本も和平を行いたいという昭和天皇の考えや、昭和天皇が木戸に松岡が現在の情勢をどう考えているかを尋ねたことを指している[99]。

重光は、最高戦争指導会議で「対「ソ」施策ニ関スル件」が決定された直後の一九四四年一〇月三、九日の両日、モスクワから一時帰国を命じていた守島伍郎公使がモスクワに帰任するのに合わせて会見した。その際、守島に「モスコーで英国側と話をする事は不可能であらうか」と述べ、それは駄目だと守島から返された[100]。この重光の発言を内

在的に理解するためには、重光がマドリードで英国側と接触を望んでいたことを念頭に置かなければならない。スペイン経由での英国政府との接触は須磨の消極的姿勢のために、一九四四年九月下旬から一〇月上旬にかけて難しい状況になってきていたので、やや苦し紛れに、モスクワでの英国との接触という案を唐突に持ち出したのだろう。換言すると、軍部の圧力もあり対ソ工作に重点を置いたが、英国と話し合うという考えを完全には捨て切れていない心境に重光はあったのである。

ただ、仮に須磨が積極的であっても、英国が日本に容易に妥協するとは考えられず、スペインでの日英接触は成果を生まなかった可能性が高い。国内においても、スペインでの英国との話し合いという案を軍部が承認したとも思えない。しかし、重光がスペインでの英国との和平ルートを模索していたことは、余り言及されることがなかったこともあり、重要である。

五、ポルトガル公使館での情報収集

（一）公開情報

ポルトガルでの情報活動は「一覧表」にもあるような人的情報源に基づくものもあるが、ここではまず公開情報の収集・分析について述べる。一九四二年一〇月からポルトガル公使に就任した森島守人は次のように回顧している。(四)

日本政府もスイスのベルン、スエーデンのストックホルムとならんで、リスボンを英米関係の情報を蒐集する

基地として選んだが、リスボンに最重点をおいて、リスボン公使館の機構を拡大、強化した。私はここで新設の情報、調査機関を主宰することとなったが、まず手はじめにヨーロッパに滞在中の商社方面の人材を総動員することを考慮した。幸い三井、三菱、正金、日銀、郵船、満鉄、商工省の貿易斡旋所などが率先、手弁当で有為の士を、新機関に参加させてくれたことは感謝にたえなかった。〔中略〕つぎに、私はスパイの利用などという古いやりくちをなるべく排し、英米方面からくる豊富な資料を整備し、それぞれの専門分野から科学的、綜合的調査をとげることに重点をおいた。〔中略〕約六〇名の人員が、地域的には英、米の二班に、また問題別では政治、経済の二班に分れ、さらにこの両班を問題別に再分して調査研究にあたった。この結果でき上った諸報告が、リスボン情報の名の下に、本邦各方面で貴重な資料として珍重がられたことは、帰朝後承知したが、日本政府の最高首脳部がどの程度に、この資料を活用したか、いまなお疑問に思っている。

森島のポルトガル公使着任と同時期の一九四二年秋、外務省は翌年度の予算決定に先立ち重要政策予算案を企画院に提出した。「情報機関ノ整備ニ関スル件」と題された予算案では「一、特殊情報機関ノ設置／イ　××××ニ在欧米情報機関ノ在外中心機関ヲ設置スルコト／ロ　本機関ノ職員ハ在葡公使館勤務トシテ外交官ノ資格ヲ有セシムルモ在葡公使館トハ独立ニ活動スルモノトスルコト／ハ　本機関ハ必要ニ応ジ他ニ移動シ得ルモノトスルコト」となっている。そして、人員として、勅任五、奏任七二、判任八〇の計一五七名を要求している。[102] ロの項で、特殊情報機関の職員はポルトガル公使館勤務の外交官の資格を有すとなっていることから、当該機関はポルトガルに設置予定であったことが分かる。したがって、イの項の××××の箇所にふさわしいのは、「リスボン」である。この予算案は、リスボンに米英情報収集の最重点をおいたという森島の回想を部分的に裏付けている。しかし、予算案では当該機関はポル

トガル公使館とは独立に活動することとなっているが、森島の回想ではポルトガル公使館の一部であり、かつ人員も森島は六〇名、予算案では一五七名となっており食い違っている。その後の経過や、戦時下の欧州での人員確保の困難さを考えると予算案の一五七名はいかにも過大である。また、森島自身が一九四三年以降もポルトガル公使館の情報活動に意見具申等を行っていることから、ポルトガル公使館から独立した情報機関という予算案の構想も企画倒れとなり、現実の情報活動の実態は引用した森島の回想が実状に近かったと考えられる。

外務省がこの予算案を作成したのと同時期の一九四二年九月下旬、開戦まで駐英大使館付海軍武官補佐官を務め帰国した朝田肆六少佐は、「対英情報ハ「リスボン」ニテ新聞、雑誌ヲ見ルヲ可トス」、「「アイルランド」ハ困難ナリ」という見解を示しており[103]、リスボンでの公開情報に依拠し米英情報を収集するという考えは、外務省だけでなく海軍にも共通した認識であった。公開情報の収集が重要であるとはいつの時代でもよく言われることだが、ポルトガル公使館での公開情報の収集・分析作業について具体的に森島は、「…右関係事務〔情報事務〕ハ雑誌其ノ他ノ刊行物ノ外日日少ナクモ七、八種ノ新聞ニ目ヲ通シ報告題目ヲ選ヒ或ル程度真疑ヲ判断シ二種ノ報道ヲ纏メテ一報告ヲ作成スルモ此ノ間報道ノ矛盾セルモノ又新聞ノコトトテ不正確不明瞭ナル点多ク此等ノ判断ニモ亦苦心ヲ要シ終日机ニ向ヒ読書作文シ居リ地味単調ニテ神経ヲ労スルコト甚タ大キク劇務タルヲ免レス」と述べていて[104]、雑誌等の刊行物に加えて毎日七～八つの新聞を読んでいること、単なる翻訳ではなく、報告書を作成する関係上一定の分析能力が求められていることもわかる。また、森島は、情報勤務要員として、「英語特ニ読書力ニ優秀ナルモノタルヲ要シ外務省員ニシテ最近英米又ハ其ノ自治領等ニ駐在シテ事情ニ精通セルモノヲ最モ好マシト見」ていた[105]。無論、ポルトガルでの公開情報の収集は一九四二年秋に始められたわけではなく、日米開戦後から約一〇日後の一九四一年一二月一七日、ポルトガルの千葉蓁一公使（森島の前任者）は「新聞雑誌ニ掲載セラレタル情報ノ蒐集選択及電報（「リスボン」情報）」発

送ニハ友岡嘱託ヲ充テ当地「ラゴス」貿易斡旋所長上村及「タイピスト」一名ヲ助手トス」ることや、英国ＢＢＣや米国のラジオ放送を聴取することを報告している。[106]「友岡嘱託」とは、法政大学教授から外務省の嘱託としてポルトガル公使館に派遣された友岡久雄である。[107] 友岡は経済問題の専門家であり、公開情報の収集分析には適した人物として選任されたのだろう。実際、友岡働きは高く評価された。[108]

ポルトガルでの公開情報の収集分析は、東京ではどう評価されたのだろうか。前述の森島の回想はリスボンからの情報を日本政府がどの程度活用したかに疑念を表している。一方、一九三九年から四五年まで参謀本部作戦課に在籍した瀬島龍三は、戦後チモール作戦を回顧する中で、「葡国を新に戦争相手とすることは、全般的に得策でないのは勿論、在リスボンの我外交公館の情報、所謂「リスボン電」は対欧米情報収集上、重要な価値をもつていたのである」とし、[109] ポルトガル公使館の情報活動に一定の評価をしている。この発言は、仮にチモール作戦等が原因で日本が「葡国を新に戦争相手とする」状態になれば、日本のポルトガルでの外交活動は停止しリスボンからの情報が入ってこなくなることに懸念を示したものである。

ポルトガルの森島から外務省に宛てた報告が更に軍に配布されたものも少なくなかったと思われるが、陸軍省に渡された森島の電報の写しが極めて少数だが防衛研究所に現存しており、検討してみたい。[110] それらの記録は、一九四三年二月一〇日森島発谷外相宛里斯本情報第七五号の一～五、里斯本情報第七六号の一～四、里斯本情報第七七号、第七八号の一～四、里斯本情報第七九号の一～二の五つの電報である。七五号と七六号は二月一〇日発、七七、七八、七九号は一一日発である。全体で約四〇枚で七九号は途中で切れている。「里斯本情報」と題された七五、七六、七七、七九号は平文で送信され、情報というよりも情勢分析である七八号は暗号化されている。これら五つの電報は米国の軍事生産の概況、米国の労働力、米国の原料問題など米国の戦時生産体制について述べたものであり、ポルトガ

ルで収集分析された米国情報の一端を垣間見ることができる。これらの電報の写しには、予め大臣、次官、局長、課長、高課員（高級課員）、課員という六つの職名が刻印された判が押されてあり、職名の下は空欄になっており、目を通したら署名や印を押すようになっている。つまり、誰が森島の電報に目を通したかが分かるようになっている。史料全体で、職名が刻印された判は、七五号、七六号、七八号、七九号の電報の冒頭に四個所ある。これらを見ると四個所すべての課長欄に二宮なる人物の署名があることが見て取れる。この時期の陸軍省で二宮という姓の課長は、軍務局軍務課長の二宮義清のことを指すと考えてよい。したがって、この史料は軍務局に回されたものである。局長の欄には――軍務局長の佐藤賢了――、三個所に「スミ」という書き入れがあり、もう一個所には赤鉛筆で印が付されているので、局長は当該史料の全てに目を通していたと思われる。また、大臣、次官の欄にも三個所には赤鉛筆の印があるので、一応、東条英機陸相や木村兵太郎次官も目は通していた。

この史料自体の元の所持者は、森川時夫（陸士三七期）であり、森川は当時、軍務局ではなく、整備局戦備課員であり、戦備課内の産業班におり、産業団体の運用、生産力拡充、産業指導を担当していた[三]。換言すると、森島の米国事情を報告した電報は外務省から陸軍省の中枢である軍務局へ行き、更に、より専門性が近いと考えられる整備局の担当課員にまで回されたのである。ただ、問題はリスボンからの報告の内容である。報告は、米国の生産体制の弱点に触れたものが多く、傍線が引かれている箇所あるいはその周辺には、「生産指導ノ原則ハ旧態依然タルモノ」（七五号ノ二）、「全体的企画ヲ行ナフ有力ナル統制機関ノ欠如」（七六号ノ一）、「米国民衆ノ未タ戦争意識ニ充分ニ目覚メ居ラサル」（七八号ノ二）、「米国経済上ノ諸問題ハ本年後半ニ入ラスシテ表面化」（七八号ノ四）等の文言が並んでいる。戦時中とはいえ、それなりの量の情報が入っては来ていたので、自らが見たい情報―この場合は米国の弱点―を見たという可能性も大いにあるだろう。

（二）富士情報

ポルトガルでの情報活動について、引用した森島の回想では公開情報については比較的詳しい言及がある。しかし、それ以外の人的情報収集（Human Intelligence）には殆ど言及がなく、「私はスパイの利用などという古いやりくちをなるべく排し」という発言があるだけである。しかし、「なるべく排し」という言葉からは、人的情報収集活動に曲がりなりにも着手していたことが窺える。実際、森島は富士情報と呼ばれる人的情報活動を行っていた。富士情報については、米国が解読した森島と本省間の電信に基づいて研究がなされてきた。ここでは、まず先行研究に依拠して富士情報の基本的な事実関係を述べる。(112)

富士情報とは、ポルトガル外務省と在外公館との間の通信・電信のコピーを情報提供者を通じて入手した情報を指す。日本側への情報提供は遅くとも一九四三年一月には開始された。情報提供者はポルトガル外務省職員だったが一九四三年四月に免職され、情報はタイピストの友人等から入手したと日本側には述べていた。情報提供者と主に接触していたのは小峰俊一書記官であり、小峰はポルトガル語の専門家であった。情報提供者と日本側との最初の接触はリスボンではなく、提供者がブラジルのリオデジャネイロに駐在していた時に始まり、小峰ともブラジル時代に交遊した。その後、提供者は枢軸国のための情報活動によりブラジル政府から追放同然となり、ポルトガル政府から本国に召還された。

一九四三年三月、富士情報について、情報提供者が同じ情報をポルトガルの日本公使館だけでなく、ポルトガル駐在の日本の陸軍武官にも売っていたのではないかという疑念が浮上した。森島は富士情報の存在をポルトガル駐在の陸海軍武官には伝えておらず、東京で陸軍、海軍、外務省で各々の情報を交換し、これに気づいた。外務本省では同

年三月二五日、森島に対し、富士情報の中には多数の価値があるものもあり、情報に疑いがないことを確認し、富士情報を継続するとともに、陸軍武官と協力し両者とも騙されることのないように、と指示した。

一九四三年七月イタリア参謀本部はローマ駐在の日本陸軍武官に、米国の情報機関のエージェントがリスボンの日本公使館の暗号書を盗写したと通知した。この情報を受けて、東京の外務本省は、調査のための人員をリスボンに派遣するようにマドリードの日本公使館に指示し、三浦文夫書記官が派遣されたが、三浦のリスボン出張の目的が暗号書の盗写の件であることは、リスボン公使館には秘せられた。マドーリドに戻った三浦は、暗号書が盗写されたかは疑わしいが、富士情報に懸念を示し、情報提供者は連合国側のダブルエージェントの可能性があり、目的は富士情報を渡すことにより、日本側の暗号文の内容を推測することを可能にし、連合国側の暗号解読を容易にするためであると報告した。

三浦の報告後の一九四三年八月九日、東京の外務省は森島に対して、富士情報が連合国側の暗号解読の手掛かりとして悪用されている可能性を伝え、情報提供者の行動について直ちに調査するように命じた。これに対し、三浦のリスボン出張の本当の目的に気づいた森島はマドリードに行き須磨に抗議し、須磨は三浦のリスボン訪問の真の目的を森島に告げ、森島が辞職するか否かにまで話が発展していった。八月二六日、森島は外務省に対して、富士情報の正確さは常に確認していること、暗号の被解読を防止するため可能な限りパラフレーズしていること、そして、情報提供者のブラジル在勤時の状況や評判を知りたければ、ブラジル大使を務めた石射猪太郎、ブラジル大使館参事官だった森喬、同大使館一等書記官だった工藤忠夫の三名に尋ねるように、と報告した。富士情報の信憑性とリスボン公使館での暗号の盗写という二つの事案が浮上したわけだが、調査にあたった三浦の上司である須磨も本省に対し森島を擁護するような意見を伝え、最終的に、本省は怒る森島に対して須磨を通じて、暗号の被解読の疑いは晴れた、心配

しないでくれと宥め、曖昧な形で幕引きされた。

以上、富士情報の事実関係を先行業績に基づきやや詳細に述べた。富士情報の経緯で注目すべきは、富士情報について森島はリスボン駐在陸海軍武官には知らせなかったにも拘らず、東京で陸軍、海軍、外務省が情報交換を行ったことにより、情報提供者が同じ情報をポルトガル駐在陸軍武官にも渡していた疑いが浮上したことである。富士情報は殆んど外務省の史料が残存していないが[113]、富士情報が陸軍にも利用されていたことは、次に引用する一九四三年一月三〇日の大本営戦争指導課の日記が明確に示している[114]。

駐伊葡国公使来電ヲ森島公使カ秘密裡ニ入手シタルトコロニ依レハ『一般戦局カ枢軸側ニトリテ日一日ト不利ナルト「トリポリ」ノ陥落トハ全伊太利国民ヲ極度ノ悲観ニ陥レ国民ノ士気著シク沮喪シ来レリ、他方反独運動ハ伊国各地ニ現ハレ政府部内ニテハ結局敗戦ハ不可避ト見ルニ傾キ且伊太利ハ本年中ニ休戦スルモノト見居レリ』ト／英米攻勢指向ノ重点カ伊国ニ在リ右情報ハ真実ナラサル迄モ一般ノ趨勢ト見ルヲ至当トスヘク枢軸側ノ弱点ハ伊国ニ在ルヲ以テ何等カ補強措置ヲ講スルノ要アラン

この日記が記入された段階では富士情報の正確さにそれほど疑問が呈されていなかった時期でもあり、イタリア駐在ポルトガル公使の見解に同意するかは別として、ポルトガル公使がそのような報告を本国にし、その内容を森島が入手したという点には疑いを持っていないようである。また、海軍次官の澤本の日記にも富士情報が散見される[115]。しかし、その後、同じ情報が陸軍武官にも渡されていたことや、三浦の警告で富士情報の信頼性は大きく揺らいだ。

実は、三浦と比較的同時期に富士情報に疑念を示した人物がもう一人いた。それは、昭和天皇である。一九四三年

八月二日、重光外相がイタリア情勢を中心に上奏後、独伊関係について昭和天皇が意見や質問をした後、「更にリスボン発富士情報（？）中のマレイ方面錫等、蘇連より米へ直輸せられ居れる情報の真偽に付て質問あらせらる（奉答、真偽疑はしく或は戦前輸入の貯蔵品を廻はせるにあらずやと思はる、今日直輸ありとは考えられず）」というやり取りがなされた[116]。昭和天皇が自ら富士情報に言及したことは、在外公館からの報告で天皇にまで達したものの中には、任国の政府関係者との会談や出先からの意見具申だけでなく、富士情報のような人的情報収集に基づいた秘密情報も含まれていたことを意味している。重光外相自身は引用した史料にもあるように富士情報に？を付けているくらいなので、富士情報にはあまり関心がなかったとも考えられる。しかし、遅くとも、八月二日の昭和天皇との拝謁後には部下に説明を求めたことであろう。したがって、本省が八月九日に森島に対して、富士情報について注意を促し、情報提供者について調べるように命じたのは、三浦の報告が主因とはいえ、一週間前の昭和天皇の発言も影響を与えている可能性がある。富士情報そのものは、「一覧表」にも記載がなく、一九四四年一一月には既に終了していたことは確実である。

（三）外交・武官電報と宮中

昭和天皇がソフィアの山路公使電や[117]、リスボンの森島公使電に言及したように、外交電報は昭和天皇を初めとする宮中にも確実に届けられていた。ここでは、外交電報が宮中に入る経路をみてみたい。結論から言うと、宮中で軍事や政治に関する重要な外交電報を読むことができたのは内大臣と侍従武官（府）である。天皇の最側近である内大臣（府）が外務省の電信の写の配付対象であったことはこれまでも指摘されていた[118]。実際、木戸内大臣時代、内大臣（府）と外務省の電信課には密接な関係があり、電信課長は交代の際には内大臣に挨拶に訪れていた[119]。通常、外交電報を内

大臣府に届けるのは比較的下位の係官だったと思われるが、木戸内大臣に「亀山電信課長、大島大使の電報を持参」したように[120]、直接電信課長自らが来訪した事例もあった。

意外と見落とされがちなのは侍従武官である。一九四二年一二月、尾形健一侍従武官（陸軍出身）は、「最近参謀本部ヨリ武官府ヘ送付スル情報ハ在外外交官、武官等ノモノ大部分ニテ南方戦況ニ関スルモノハ送付シ来ラス又別ニ通報スルコトモナシ、頻繁ノ情況ノ御下問アルモ奉答スルコトヲ得ス誠ニ申訳ナシ。参謀本部ニ再三催促スルモ武官府ニ通スルコトハ総テ御上ニ通スルモノト考ヘ具合悪シト思ツテカ敬遠シアルニ非スヤ」と記しており[121]、不要なほどに外交官や駐在武官からの情報が侍従武官府に来ている一方、南方の戦況に関する情報が来ていなかったことが分かる。

試みに一九四二年七月から翌年一月の間の坪島文雄侍従武官（陸軍出身）の日記から[122]、外交電報や在外武官電に触れている箇所を見てみたい。マドリードからの須磨電やベルリンからの大島電による北アフリカ戦線の戦況（一九四二年七月一四日条[123]）、ハンガリー駐在武官からのソ連赤軍の兵力判断（同年七月二一日条）、スウェーデン公使館付武官からの「九月上旬ニ於ケル欧「ソ」連戦線ニ展開シアル赤軍兵力」（同年一〇月九日条）、北アフリカ、太平洋諸島での連合国の航空機数や英国の保有する艦艇数を報告したアンカラの栗原大使電（一九四三年一月二五日条）が挙げられる。あくまで、これらは侍従武官府に届いた外交・武官電報の中で坪島の興味を惹いたものを彼が日記に摘記したもので、実際にはもっと多くの報告が侍従武官府には達していたと考えられる。

六、ポルトガル駐在陸軍武官の活動

ここで、ポルトガルにおける陸軍の情報活動に触れたい。外務省がポルトガルを対米英情報収集の拠点とする構想

を描いていた一九四二年秋より少し前の同年七月二八日、三島美貞陸軍武官は参謀本部に宛て、今後のポルトガルで行う予定の情報活動やエージェントについて詳細で包括的な報告をした。[124] まず、三島は当地に着任以来、情報網の構築を真剣に探求し下準備が整ったとした上で、八月以降の情報活動資金（the special espionage funds）を要求している。その際、三島は、リスボンは世界のあらゆる国のスパイの秘密の闘いの場所であり、各国は情報収集のためのエージェントへの支払に巨額の資金をつぎ込んでおり、リスボンで収集しうる情報の機会と質は非常に大きいので、同様に掛かるコストも大きい、と釘をさしている。

三島は具体的なエージェントとして、まずハンガリー人のタマシを挙げ、月に五百円を要求し、現金は必要ないがタマシには既にそれに類するものを支払ったことがあると報告している。このタマシというエージェントは「一覧表」に記載されている「タマシ」のことを指している。タマシはリスボンの陸軍武官だけでなく、森島の前任者の千葉公使在任時からリスボンの日本公使館とも連絡しており、[125] ポツダム宣言後の大戦最末期には井上益太郎参事官と接触し、米国大使館の陸軍武官が日本公使館との会見を要望していることを伝え、森島公使とも二、三回面談した。[126]

二人目のエージェントとして三島はタマシの二〇年来の友人であり同じくハンガリー人のフロップを挙げている。フロップは米国のハンガリー陸軍武官室で一六年間働き、最近離米しリスボンに到着し、芳仲和太郎ハンガリー駐在陸軍武官の仲介で、名目上、ハンガリー公使館の一員だが、実際は三島の統制の下にあると伝えている。フロップは技術情報のエージェントで交友関係も広く有能であり、彼に対して月に二千円を払いたいと要求している。フロップへの資金について三島は、この報告をする約一ヶ月前の六月二六日、ハンガリーの芳仲武官に対してフロップに対する最初の報酬を直ちに支払いたいと連絡しており、[127] 三島の裁量で使える経費で既にフロップには当座の資金が渡されていた可能性もある。フロップなるエージェントは、「一覧表」にスペインの陸軍武官の情報として「フ」と記載さ

れ、従来在ポルトガル武官が使用していたハンガリー人諜者「フイリツプ」とある人物を指しており、「フイリツプ」は何らかの事情でポルトガルからスペインに移動したと思われる。三島は人的情報源としてタマシやフロップ以外にポルトガル人の使用も検討し、月千円を要求し、また、米国の新聞・雑誌の入手に同じく月千円を要請している。更に、芳仲武官の仲介でハンガリー参謀本部から秘密通信のための器材と人員を提供されたので、これらの器材を携行しフロップの友人の一人をダカールに派遣することを計画しており、月四千円を請求している。

おわりに

本稿で明らかにしたことをまとめておきたい。まず、スペインの須磨の東情報に関していえば、これまで注目されてこなかった桜井敬三陸軍武官の報告を提示し、ガダルカナルへの米軍の上陸の約一週間前に東情報の確度を巡り、参謀本部と現地スペインの陸軍武官で課題となっていたことを指摘した。これは、従来須磨情報と東京の軍中央の関係のみに焦点が合わされがちだった視点に、現地での在外公館と陸軍武官室間での情報共有という視点を導入した。更に、一九四二年秋には一定程度、須磨からの情報が軍内部で受容され、須磨が知らせた欧州和平情報により、陸軍が近衛文麿へ入院中止要請をした事実も指摘した。また、一九四三年三月の須磨の別の欧州和平情報は虚報だったとはいえ、大本営戦争指導課が戦争終結構想を策定する方向へ促す一要因になったことを論じた。更に、須磨はいわゆる徹底抗戦派であり、スペインで和平工作を試みた重光外相の障害になっていたことを指摘した。併せて、軍部の要請もあり日本外交がソ連に傾斜するなかでも、重光が英国との接触を模索していたことの重要性を喚起した。

ポルトガルでの情報活動については、近年、ソ連の対日参戦との関係でM情報が注目されており[128]、本稿ではM情報

については深く検討出来なかったが、今後の課題としたい。また、ポルトガル、スペイン以外の大戦期の中立国や、海軍武官の行った情報活動も課題となる。

《注》

(1) 第二次大戦下の中立国における日本の情報活動に関する先行研究は、スペインを扱ったものとして（一部ポルトガルも含む）、「NHK特集　私は日本のスパイだった」一九八二年九月二〇日放送、岩島久夫『情報戦に完敗した日本』（原書房、一九八四年）、秦郁彦『昭和史の謎を追う（上）』第一九章（文春文庫、一九九九年）、ゲルハルト・クレープス（田嶋信雄、井出直樹訳）「第二次世界大戦下の日本＝スペイン関係と諜報活動（一、二）」（『成城法学』六三、六四号、二〇〇〇、二〇〇一年）、拙稿「駐スペイン公使須磨弥吉郎の情報活動とその影響」（『戦略研究』七号、二〇〇九年）、フロレンティーノ・ロダオ（深澤安博ほか訳）『フランコと大日本帝国』（晶文社、二〇一二年）、Tony Matthews, *Shadows Dancing:Japanese Espionage Against the West 1939-1945*（New York: St. Martin's Press, 1994）など。スウェーデンの小野寺信陸軍武官に焦点を合わせた研究は多数あり、最新ものとして、岡部伸『消えたヤルタ密約緊急電――情報士官・小野寺信の孤独な戦い』（新潮社、二〇一二年）、吉見直人『終戦史　なぜ決断できなかったのか』（NHK出版、二〇一三年）第一章。筆者は、岡部著に対する書評を、『戦略研究』（一四号、二〇一四）一一六～一二二頁で行った。トルコでの情報活動については、戸部良一「第二次世界大戦下の在トルコ日本大使館」（http://acikerisim.lib.comu.edu.tr:8080/xmlui/bitstream/handle/COMU/604/japon_arastirmacilarin_gozunden_turkiye_sempozyumu_2009.pdf）を参照。大戦中のスペイン公使の須磨弥吉郎や、ポルトガル公使の森島守人の中国在勤時の情報活動については、小山俊樹「満州事変期における外交機密費史料の検討――在中国日本公館の情報活動を中心に」（『情報史研究』第四号、二〇一二年）を参照。

(2) 筆者は既に、「「在外武官（大公使）」電情報網一覧表」にみる戦時日本の情報活動」（『政経研究』四九―二、二〇〇九年）で一覧表を紹介し、ドイツ、スウェーデン、スイス、ハンガリー、中国での情報活動を検討した。一覧表は、「戦況手簿　沖縄、濠北、ビルマ、タイ、内地、中部太平洋、北方方面関係」（防研、中央・作戦指導その他・四三―二）に所収。

(3) 須磨「運命の日の太陽に　最終回」(『日本週報』一九五一年一一月、第一八九号）四二～四三頁。
(4) 須磨「須磨情報秘話」(『文藝春秋』一九五〇年一二月号）一二九頁。
(5) 桜井敬三は一九四一年四月に現地限りのスペイン公使館付武官となり、一九四三年一〇月に正式に公使館付武官となった（一九四一年四月二日、近衛臨時外務大臣事務管理発在西須磨公使宛、第四〇三号、いずれも「在外公館付武官関係雑纂」第六巻、外史）。
(6) 三月一四日、西班牙公使館附武官発総務部長宛、第三九三号（「在外帝国公館関係雑件　設置関係　西国ノ部」、外史）。
(7) 前掲『フランコと大日本帝国』二三六～二三七、三四四頁、秦郁彦編『日本陸海軍総合事典［第二版］』(東京大学出版会、二〇〇五年）一二五頁。
(8) 「真田穣一郎日記№二四」(防研、中央・作戦指導日記・六九）。真田は当時参謀本部作戦部長。
(9) 細川護貞『細川日記（上）』(中公文庫、二〇〇二年）八九頁。
(10) 前掲『フランコと大日本帝国』二三〇～二三一頁、Matthews, op.cit. ,p. 158. 軍令部第一部長の中沢佑は一九四三年一〇月初旬頃の覚書で、「地中海艦隊動静情報（Ⅰ）」と題して、地中海での連合国側の海軍兵力を記しているが、情報源として、ポルトガルや上海駐在武官からの報告と並び、「10－4　タンジール陸武官／10－1　在地中海敵艦隊」として長谷部からの情報に注意を払っている（「昭和十八年十月起同十九年一月七日迄　作戦参考第二」(「中沢佑関係文書」八一）国立国会図書館憲政資料室蔵)。
(11) Report on 2nd Interrogation of SUMA Yakichiro by Maj.Ralli on 22 April 46 (RG65 Released Under the Nazi and Japanese War Crimes Disclosure Acts CLASSIFICATION65ESPIONAGE Box236, U.S.National Archives).
(12) Report on Interrogation of Col.SAKURAI Keizo by Maj.Ralli at War Ministry on 8 April 1946（注11と同じ)。
(13) 註1のスペインを扱った諸研究。
(14) SRA17175 (JAPANESE ARMY ATTACHÉ MESSAGES, 1943-1945, RG457Entry9004, U.S.National Archives). 米国は日本の陸軍武官用暗号を一九四三年頃から解読に成功しており、本稿で引用する一九四二年に発信された電文は傍受していたものを、一九四五年に入り解読したものである。

⑮ 外務省編『日本外交文書　太平洋戦争　第二冊』（二〇一〇年）一〇五六～一〇五七頁。

⑯ スペイン現地での情報活動について須磨と軍との間の情報交換は海軍との間にもみられる。一九四三年一月三一日、須磨は本省に「陸軍機関設置以来ノ経験ニモ徴シ「タンヂール」ノ情報蒐集基地トシテノ価値ヲ考フルニ「ジブラルタル」ニ於ケル敵ノ動静観察ニハ便アルモ（此ノ点ヨリセハ「アルヘシラス」モ同様ニテ既ニ海軍側ニ於テハ此処ニ諜者ヲ有ス）」と述べている（原口邦紘「史料紹介　第二次世界大戦下日本・スペイン公使館昇格問題に関する須磨弥吉郎覚書」『外交史料館報』第二五号、二〇一二年、一八二頁）。つまり、須磨はある程度海軍の情報活動について承知していたわけで、須磨と海軍間で連絡があったことが分かる。

⑰ 前掲『情報戦に完敗した日本』一三八～一四〇頁、前掲『昭和史の謎を追う（上）』四八五～四九〇頁。

⑱ 前掲「駐スペイン公使須磨弥吉郎の情報活動とその影響」五一頁。

⑲ 「真田穣一郎日記№一〇」（防研、中央・作戦指導日記・五五）。

⑳ 「真田穣一郎日記№一一」（防研、中央・作戦指導日記・五六）。

㉑ 前掲「第二次世界大戦下の日本＝スペイン関係と諜報活動（一）」三〇二～三〇三頁、前掲『フランコと大日本帝国』一七九頁、"MAGIC" SUMMARY No. 318, February 7, 1943（*The MAGIC Documents: Summaries and Transcripts of the Top Secret Diplomatic Communications of Japan, 1938-1945*（Washington D.C.: UNIVERSITY Publications of America, 1980）). 本稿で引用する米側の解読記録であるMAGIC SUMMARYは特に断りのない限り本史料群からの引用である。

㉒ 前掲「駐スペイン公使須磨弥吉郎の情報活動とその影響」五一～五二頁。

㉓ 一月一二日、須磨公使発谷外相宛、第三三号（「大東亜戦争関係一件　中華民国国民政府参戦関係」第二巻、外史）。

㉔ 「昭和十八年一月十六日／大東亜戦争ヲ繞ル各国動向　第十報」（外務省政務局編『世界情勢ノ動向　第一巻第一報～第二十四報』クレス出版、二〇〇一年）。

㉕ MAGIC SUMMARY, August 7, 1942.

㉖ "MAGIC" SUMMARY No. 282 January 2, 1943（RG457Entry9030, U.S. National Archives).

㉗ 「澤本頼雄海軍大将業務メモ（叢三）」（防研、一・日誌回想・八九四）。スペルミスと思われるものも原文のまま。

(28) 軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班　機密戦争日誌（上）』（錦正社、一九九八年）二九三頁。
(29) 「甲谷悦雄日記」（防研、中央・戦争指導重要国策文書・八二五）。
(30) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　大本営陸軍部〈五〉―昭和十七年十二月まで』（朝雲新聞社、一九七三年）九二～九四、一三一～一三九、二六九～二九九頁。
(31) 「田中新一中将業務日誌」（防研、中央・作戦指導日記・三一）。前掲『大本営陸軍部〈五〉』一三九～一四二頁では和平問題に関する田中新一の構想に言及し、滅ぶか滅ぼされるかという絶対戦争の観念が薄く、独ソ和平、欧州和平、日中和平に関心を寄せたのは、連合国側との個別又は全体に条件和平が成立し得ると考えており、米国の戦力を過小評価したと批判的に叙述している。その中で、一九四二年一〇月一〇日に田中が欧州和平について検討していたことにも触れている（一四〇頁）。田中あるいは陸軍全体が和平全般について甘い考えを持っていたことに異論はない。しかし、一〇月一〇日に田中が欧州和平を検討したのは、前日九日に合同研究で須磨電が話題になったことを視野に入れると、田中が抱懐していた自らの考えを表出したというよりも、直接的には須磨からの和平情報に反応したものとみなすのがより妥当な解釈だろう。
(32) 天羽英二日記・資料集刊行会編『天羽英二日記・資料集第四巻』（同日記・資料集刊行会、一九八二年）四九六頁。
(33) 宇垣一成（角田順校訂）『宇垣一成日記　3』（みすず書房、一九七一年）一五一九頁。
(34) 前掲『天羽英二日記・資料集第四巻』四九七頁。
(35) 同前、四九九頁。
(36) 同前、五〇〇頁。
(37) 同前、五三二頁。
(38) 同前、四九一頁。
(39) 参謀本部編『杉山メモ（下）』（原書房、一九九四年）一六一～一六二頁。
(40) 同前、一七一頁。
(41) "MAGIC" SUMMARY, October 7, 1942.
(42) スペインでのテイラーの発言は、Carlton J.H. Hayes, *Wartime Mission in Spain 1942-1945* (New York: Da Capo Press,

1976), pp.70-72 を参照。

(43) Harold H. Tittmann III., ed., *Inside the Vatican of Pius XII: The Memoir of an American Diplomat During World War II* (New York: Image Books, 2004), pp. 125-130. George Q Flynn. *Roosevelt and Romanism: Catholics and American Diplomacy, 1937-1945* (Westport: Greenwood Press, 1976), pp.198-200.

(44) Tittmann III, op. cit p.130.

(45) Hayes, op. cit. p. 72.

(46) 前掲「第二次世界大戦下の日本＝スペイン関係と諜報活動（二）」二四七～二四九頁、前掲『フランコと大日本帝国』二四三～二四五頁。

(47) 「塞翁ヶ馬」（「須磨弥吉郎関係文書」須磨【二】15、外史）。

(48) 「澤本頼雄海軍大将業務メモ（叢四）」（防研、一・日誌回想・八九五）。

(49) 一九四二年一一月と翌年二月の「世界情勢判断」の詳細な比較は、当時海軍が行なっている（「世界情勢判断比較用　一八、二、二七」（「基本国策関係文書綴（其の四）」防研、一・全般・六一））。二つの「世界情勢判断」の正文は、前掲『杉山メモ（下）』一六一～一六九、三八二～三八五頁。

(50) 同前、三八五～三八六頁。

(51) 同前、三八一頁。

(52) 中尾祐次編『昭和天皇発言記録集成（下巻）』（芙蓉書房出版、二〇〇三年）七八、八一頁。

(53) Tittmann III, op. cit. p.145.

(54) "MAGIC" SUMMARY No. 324, February 13, 1943.

(55) "MAGIC" SUMMARY No. 328, February 17, 1943. ムッソリーニは戦争政策に批判的な主要閣僚を更迭し、兼任していない閣僚職一二人のうち九人を更迭した。更迭された一人がチアノである（北原敦編『新版　世界各国史　15 イタリア史』山川出版社、二〇〇八年、五〇三頁、ニコラス・ファレル（柴野均訳）『ムッソリーニ　下』白水社、二〇一一年、二一七頁）。

(56) "MAGIC" SUMMARY No. 331, February 20, 1943.

(57) Ray Moseley, *Mussolini's Shadow: THE Double Life of Count Galeazzo Ciano* (New Haven: Yale University Press, 1999), pp.155–167.

(58) スペルマンについては、Gerald P. Fogarty, *The Vatican and The American Hierarchy from 1870 to 1965* (Stuttgart: Anton Hiersemann, 1982), pp. 291–298, John Cooney, *The American Pope: The Life and Times of Francis Cardinal Spellman* (New York: A Dell Book, 1984), pp. 170–180, を参照。いずれにしても、スペルマンが須磨電のような行動を取ることはなく、和平という観点でいえば、せいぜいイタリアを枢軸から切り離す程度であり、ドイツと交渉したなどということは有り得ない。

(59) "MAGIC" SUMMARY No. 349, March 10, 1943.

(60) "MAGIC" SUMMARY No. 341, March 2, 1943（注26と同じ）.

(61) 注59と同じ。

(62) "MAGIC" SUMMARY No. 350, March 11, 1943.

(63) "MAGIC" SUMMARY No. 363, March 24, 1943.

(64) Moseley, op. cit. p.162.

(65) "MAGIC" SUMMARY No. 352, March 13, 1943.

(66) 前掲「澤本大将業務メモ（叢四）」。

(67) "MAGIC" SUMMARY No. 367, March 28, 1943.

(68) "MAGIC" SUMMARY No. 370, March 31, 1943.

(69) 伊藤隆・劉傑編『石射猪太郎日記』（中央公論社、一九九三年）五五六頁、一九四三年三月一九日条。

(70) 木戸幸一『木戸幸一日記』下巻（東京大学出版会、一九六六年）一〇一五頁。

(71) 前掲『昭和天皇発言記録集成（下巻）』一九三頁。

(72) 「昭和十八年三月二十二日／欧州和平問題ノ動キト帝国ノ対策／企画院総務室」（「毛利英於菟関係文書」三―一一、国立国会図書館憲政資料室蔵）。この史料は、欧州和平について日本がどのような情報を入手していたかを知る上でも極めて有益である。この文書には、本稿でも度々言及している一九四二年秋のテイラーの和平打診や須磨の四者会談の情報も含まれている。また、

トルコやブルガリアの在外公館からの情報も含まれており。三月三日に昭和天皇が興味を示した山路電と思われるものも記載されており、「在勃公使ノ諜報者ガ勃国参謀本部ヨリ得タル情報トシテ報告スル所ニヨレバ独ヨリ同参謀本部ニ対シ独英間ニハ単独講和ニ関スル案成立シ」たというものである。

(73) 前掲『機密戦争日誌（上）』三七二頁。

(74) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　大本営陸軍部〈六〉―昭和十八年六月まで』（朝雲新聞社、一九七三年）四八五～四八八頁、山本智之『日本陸軍戦争終結過程の研究』（芙蓉書房出版、二〇一〇年）七九～八一頁、同『主戦か講和か―帝国陸軍の秘密工作』（新潮選書、二〇一三年）七〇～七二頁。史料自体は、江藤淳監修・栗原健・波多野澄雄編『終戦工作の記録（上）』（講談社、一九八六年）一二五～一三二頁に所収。

(75) 前掲『機密戦争日誌（上）』三七四～三七五頁。

(76) 同前、三七五頁。

(77) 前掲『大本営陸軍部〈六〉』四八八～四八九頁、前掲『日本陸軍戦争終結過程の研究』七七～七八頁、前掲『主戦か講和か』六九～七〇頁。

(78) 「昭和十八年大東亜戦争戦争指導関係綴　一般之部」（防研、中央・戦争指導重要国策文書・一一五二）。

(79) 「東久邇宮日誌一三／二三」（防研、中央・戦争指重要国策文書・一二九七）。

(80) 近衛文麿伝の執筆にあたった矢部貞治に対する若槻礼次郎の談話（矢部『近衛文麿』読売新聞社、一九七六年）六七五～六七六頁。

(81) 重光葵『昭和の動乱　下』（中央公論社、一九五二年）二六二頁。

(82) 小倉和夫『吉田茂の自問―敗戦、そして報告書「日本外交の過誤」』（藤原書店、二〇〇三年）二五八頁。

(83) 伊藤隆ほか編『高木惣吉　日記と情報　下』（みすず書房、二〇〇〇年）七七〇頁。

(84) Toshikazu Kase, *Journey to the Missouri* (New Haven: Yale University Press, 1950), p.183 では "Shigemitsu also tried during 1944 to establish contact with the British government through Sir Samuel Hoare in Madrid, but his efforts bore no fruit as our legation there did not prove helpful" と述べている。ところが、この記述について同書の加瀬自身の日本語訳本で

は（加瀬『ミズリー号への道程』文藝春秋新社、一九五一年、二六七頁）、「一九四四年中には、重光外相はマドリッドにおいて、英国大使サア・サミュエル・ホーアを通じ、英国政府と連絡を試みたが、色々の事情があつて成功しなかつた」となっており、英語版とは異なり、スペイン公使館を批判した箇所は日本語版では存在せず違った表現になっている。無論、加瀬の真意は英語版の方にある。日本語版刊行時、須磨は存命だったので、須磨に配慮したものと思われる。また、英文版のp. 221の第四パラグラフではスウェーデンで和平工作を行った小野寺信陸軍武官を痛烈に批判しているが、この箇所も日本語版では（三二三～三二四頁）存在していない。重光は戦後改新党総裁になり、須磨も改新党所属の代議士だったので、重光は須磨の戦時中の言動を批判するようなことはますます言い難い状況になったのだろう。

(85) 細川護貞『細川日記（下）』（中公文庫、二〇〇二年）二八九頁。

(86) アントニー・ベスト（武田知己訳）『大英帝国の親日派――なぜ開戦は避けられなかったか』（中央公論新社、二〇一五年）三六、二四三頁。

(87) 重光葵『重光葵外交回想録』（毎日新聞社、一九五三年）二四九～二五四頁、伊藤隆・渡邊行男編『重光葵　手記』（中央公論社、一九八六年）一〇〇～一〇八頁。

(88) 前掲『高木惣吉　日記と情報　下』七六四～七六五頁。

(89) 伊藤隆・武田知己編『重光葵　最高戦争指導会議記録・手記』（中央公論新社、二〇〇四年）一一一頁。

(90) 前掲『細川日記（下）』三〇六～三〇八頁。

(91) 同前、三〇八～三〇九、三一二頁。

(92) 一九四四年八月二八日、須磨公使発重光外相宛、第九一八号（外務省編『日本外交文書　太平洋戦争　第一冊』二〇一〇年、六七一～六七三頁）。

(93) 須磨未千秋編『須磨弥吉郎外交秘録』（創元社、一九八八年）一七、一二三頁。

(94) 一連の経緯は、参謀本部所蔵『敗戦の記録』（原書房、一九八九年）五五～五七、一六八～一七四、一八六～一九二頁。九月二八日の最高戦争指導会議決定は、前掲『重光葵　最高戦争指導会議記録・手記』一一九頁から。

(95) 細谷千博『両大戦間の日本外交』（岩波書店、一九八八年）三〇三～三三六頁。

(96) 前掲『重光葵　最高戦争指導会議記録・手記』四二～四三頁。傍線は原文のまま。

(97) 前掲「「在外武官（大公使）電情報網一覧表」にみる戦時日本の情報活動」四五九～四六〇頁。また、大戦中の日本とスイスの関係全般については、大堀聡氏の「日瑞関係のページ」（http://www.saturn.dti.ne.jp/~ohori/）を参照。

(98) スウェーデンを介した和平工作は、小林龍夫「スウェーデンを通じる太平洋戦争終結工作」（『国学院法学』六九号、一九八一年）を参照。

(99) 前掲『重光葵　最高戦争指導会議記録・手記』一一一～一一二頁。木戸自身は重光との九月二六日の会見について、「官邸にて重光外相と戦争の見透其他につき懇談す。前途の多難を思ふ」とだけ日記に記しており（前掲『木戸幸一日記』下巻、一一四三頁）、重光の手記と比較するとやや具体性に欠ける。

(100) 守島康彦編『昭和の動乱と守島伍郎の生涯』（葦書房、一九八五年）一八六～一八七頁。

(101) 森島守人『真珠湾・リスボン・東京』（岩波書店、一九五〇年）八二～八三頁。

(102) 石川準吉『国家総動員史　資料編　第四』（国家総動員史刊行会、一九七六年）二二～二三、一一八三～一一八六頁。

(103) 「中原義正中将日誌六／一一」一九四二年九月二五日条（防研、一・日誌回想・四四二）。

(104) 一九四二年一二月一一日、森島公使発谷外相宛、第八七五号、「本省並びに在外公館員配属増員関係雑纂」第五巻、外史。

(105) 一九四三年二月一一日、森島公使発谷外相宛、第七九号、同右簿冊所収。

(106) 一九四一年一二月一七日、千葉公使発東郷外相宛、第二八八号、「大東亜戦争関係一件　館長符号扱来電綴」第四巻、外史。

(107) 友岡が外務省の嘱託になった経緯や彼の詳細な履歴は、前掲「日瑞関係のページ」（http://www.saturn.dti.ne.jp/~ohori/sub-tomooka.htm）を参照。

(108) 一九四三年二月下旬、友岡のベルリン転任にあたり、リスボンの森島は「同嘱託ハ御承知ノ通リ当館手不足ナリシ際情報調査主任トシテ敵側情報ノ蒐集就中英米経済情勢ノ調査ニ尽力シ深ク之ヲ多トシ居ル次第ニ付右本省ノ記録ニ存セラルル」と述べている（一九四三年二月二四日、森島公使発谷外相宛、第一二五号、「在外公館雇員及嘱託関係雑件」第五巻、外史）。

(109) 「大本営機密戦争日誌中作戦関係事項（大本営機密戦争日誌中思ひ出せる断片事項）昭和三二、十二、瀬島竜三（ママ）」（防研、文庫・依託・一〇九）。

(110)「森川史料　米国軍事生産発展概説等電報綴　森島公使」（防研、中央・軍事行政情報・一一〇）。

(111)「陸軍省各局課業務分担表　昭和十七年八月」（防研、中央・軍事行政職員表・一二一）。

(112) Matthews, op. cit., pp. 121, 123-125, 140-144、前掲『昭和史の謎を追う（上）』四九二～四九三頁。

(113) 管見の限りにおいては、外交史料館に所蔵されている記録で富士情報に言及したものは、一九四三年二月、森島が電信担当の係官の増員を要請した際に、「最近情報、観測電報激増セル外富士情報其ノ他特殊ノ情報電報モ漸次増加ノ見込」と伝えたものがあるだけである（一九四三年二月一五日、森島公使発谷外相宛、第九六号、「本省並びに在外公館員配属増員関係雑纂」第五巻、外史）。

(114) 前掲『機密戦争日誌（上）』三四二～三四三頁。

(115) 澤本日記、一九四三年三月一六、二三日条（前掲「澤本大将業務メモ（叢四）」）。

(116) 前掲『重光葵手記』三九〇頁。

(117) 欧州和平に関する昭和天皇の山路電への関心は既述の一九四三年三月初旬のものだけでなく、約一月前の一九四三年二月初旬にもあった。一九四三年二月二日、昭和天皇は蓮沼侍従武官長に対して、英独和平を報告した山路電に言及し、ヨーロッパの戦況の見通しとその日本への影響に関する統帥部の見解を問い質した（前掲『昭和天皇発言記録集成（下巻）』一八六～一八七頁）。二月の山路電は参謀本部でも一応注意をひいたが、余り重視されていない（前掲『機密戦争日誌（上）』三四四頁、一九四三年二月一日条）。二月と三月の欧州和平に関する山路電は別物だが、二月のものには、「勃国外務省政務局長モ一月二十八日遠ラズ和平斡旋ノ動キヲミルヤモシレズト語」ったことが含まれていると思われる（前掲「欧州和平問題ノ動キト帝国ノ対策」）。

(118) 小池聖一『近代日本文書学研究序説』（現代史料出版、二〇〇八年）一六七頁。

(119) 一九四二年一一月五日、退任する亀山一二電信課長は新任の工藤忠夫と共に木戸を訪ね、一九四四年一二月二八日、退任する工藤は新任の大江晃電信課長を同道し木戸を訪問している（前掲『木戸幸一日記』下巻、九九二、一一六二頁）。

(120)『木戸日記』一九四一年四月一八日条（同前、八六九頁）。

(121) 前掲『昭和天皇発言記録集成（下巻）』一六八頁。

(122) 坪島文雄「服務の参考　その一昭十七、七、七以降」、同「服務の参考　その二昭十七、十月以降」（靖国神社偕行文庫所蔵の複製を利用）。

(123) 同日の坪島日記には、「大島大使電ニ依レハ独ハ優秀ナル機械化師団ヲ増進シアリト言フモ真偽未タ判明セス」とある。これは大島が七月二日に情報提供者のドイツ人と北アフリカ戦線について会談した際、そのドイツ人が、「目下大至急精鋭機械化数箇師団ヲ南下セシメツツアリ之カ到着スレハ埃及ハ素ヨリ近東ニ対スル作戦ヲモ実施シ得ルニ至ルヘシ」と述べた旨を打電したことを書き留めたものと思われる（七月三日、大島大使発東郷外相宛、第八四〇号、「大東亜戦争関係一件　館長符号扱来電綴」第六巻、外史）。北アフリカ戦線を巡っては、六月二六日、ドイツが戦果を挙げたので昭和天皇がヒトラーに対して親電を発するように木戸に提案したことや（前掲『木戸幸一日記』下巻、九七〇頁）、丁度、エル・アラメインの戦闘の真っ最中でもあり、坪島は関心を持ったのだろう。

(124) SRA16260-16262（注14と同じ）。

(125) MAGIC SUMMARY, August 13, 1942.

(126) 前掲『真珠湾・リスボン・東京』一一六～一一七頁。

(127) SRA17652（注14と同じ）。

(128) 前掲『終戦史』四八～五七、一〇四～一〇六頁。

本稿は二〇一七年七月二二日に行われた拓殖大学国際日本文化研究所の研究会での報告に基づいており、有益なコメントや質問を下さった方々に御礼を申し上げる。また、本稿は、科学研究費補助金（研究課題番号二一三二〇一二四、二五七八〇〇九六）の成果の一部である。

（原稿受付　二〇一八年一月一一日）